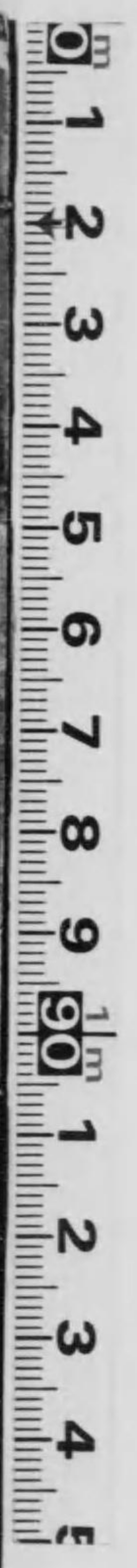


家元編 四季始末記 全

10
260



始



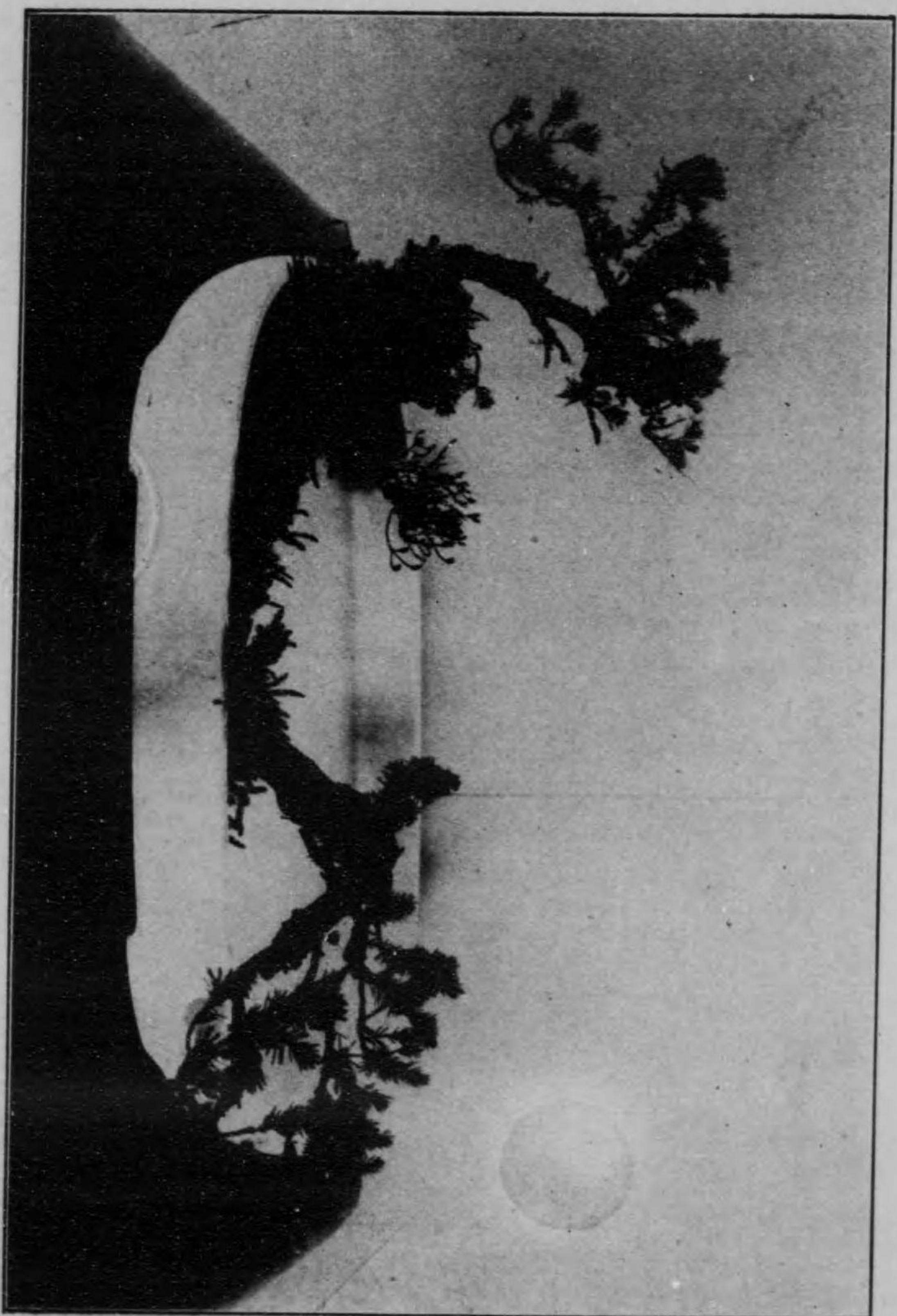
10-260



李比盛花

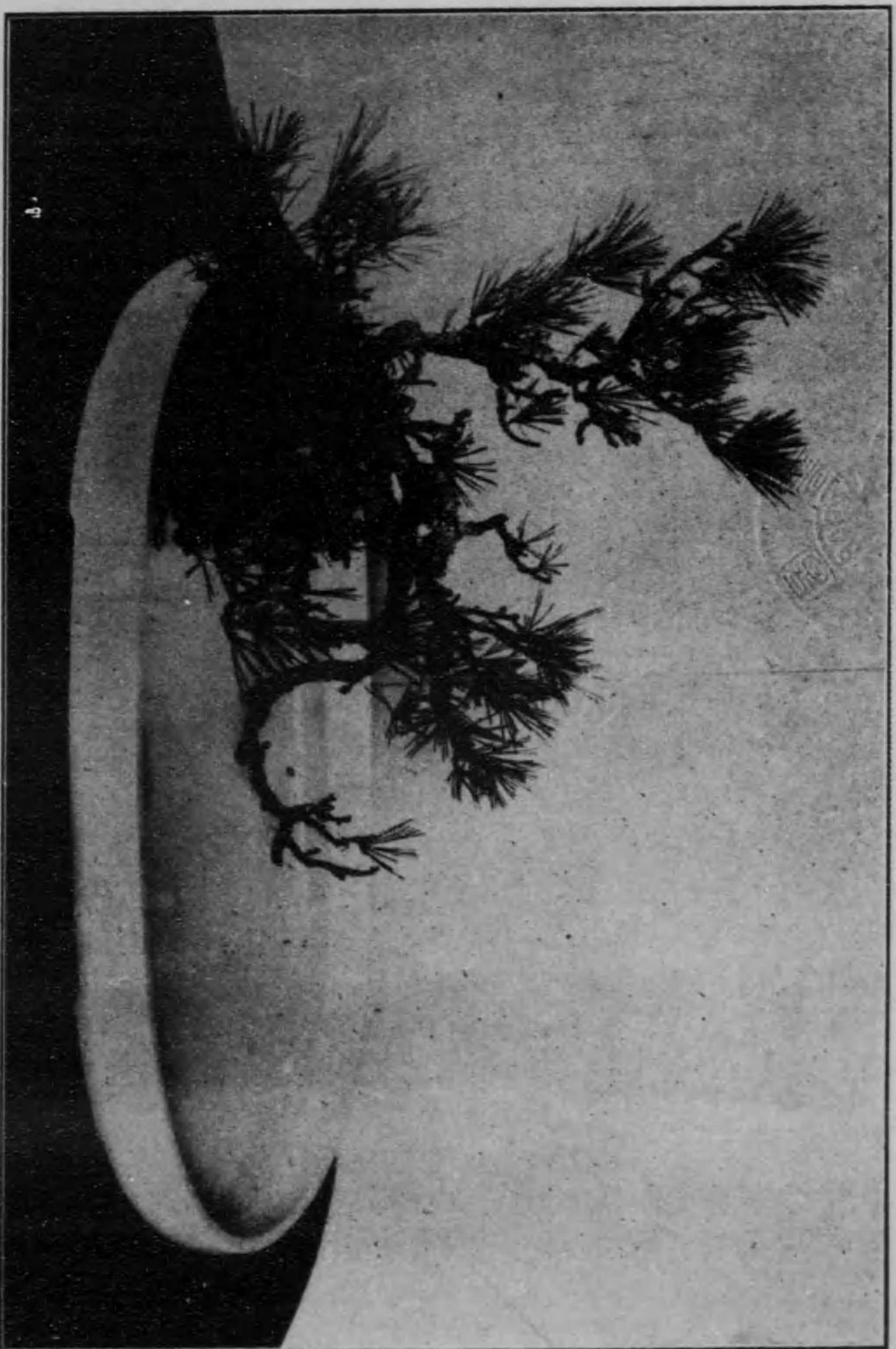
盛花家元 小原光雲著

大正
7.5.14
内交



松の大盛花 (其二)

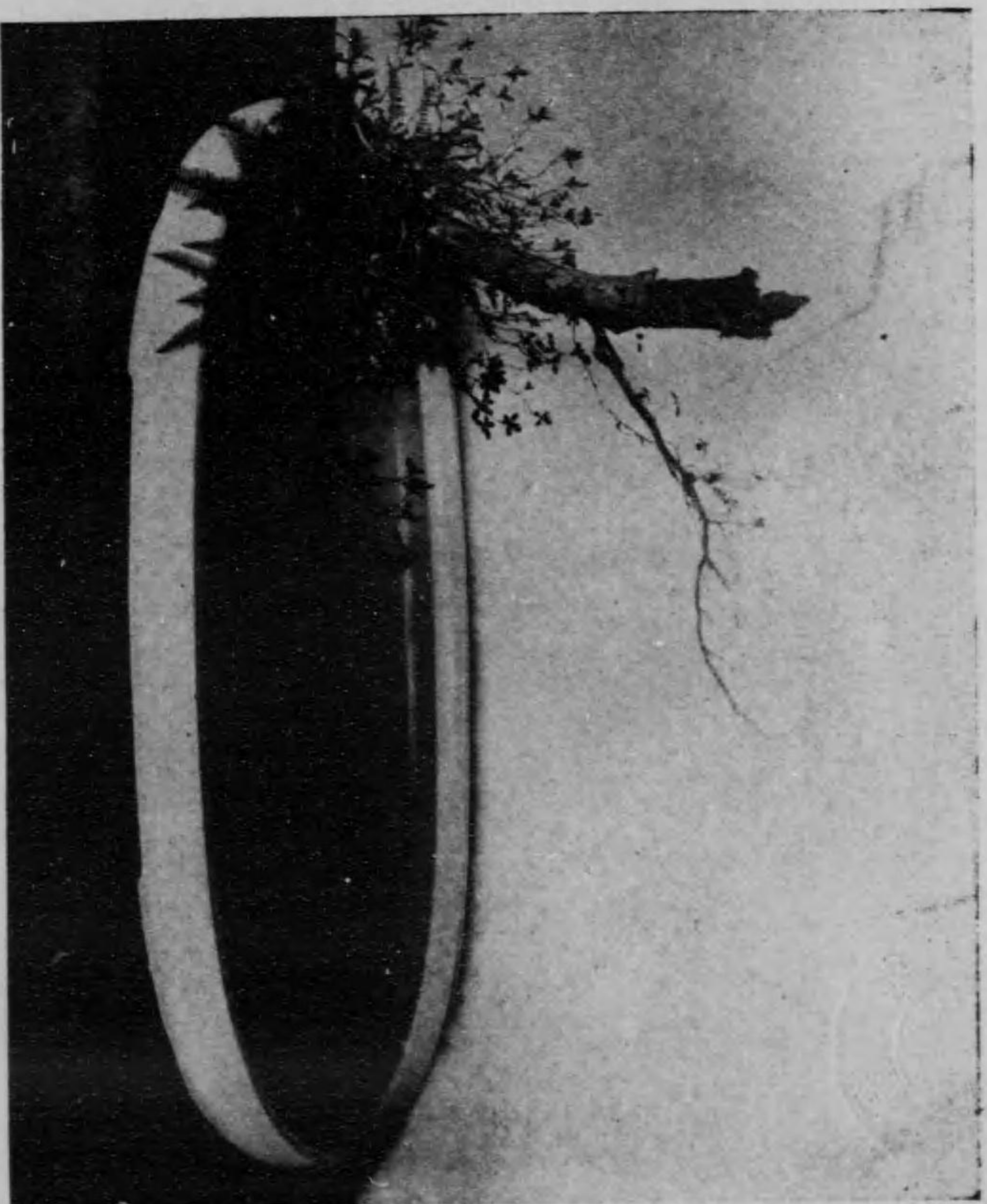




松の大盛花 (其三)



初春杉 日かげ 藪母子 普付つじ 松

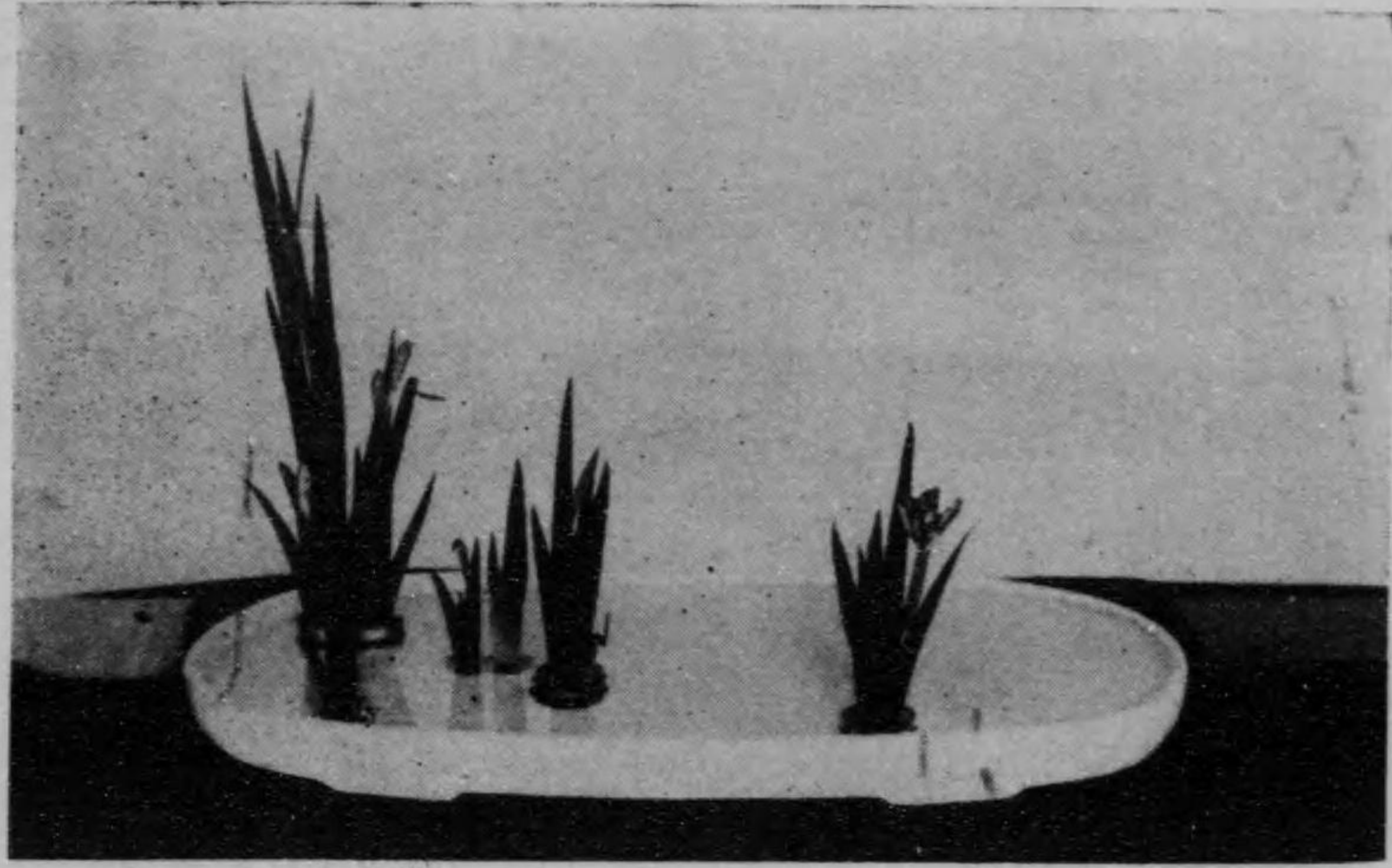


春まつり副つじりざくら

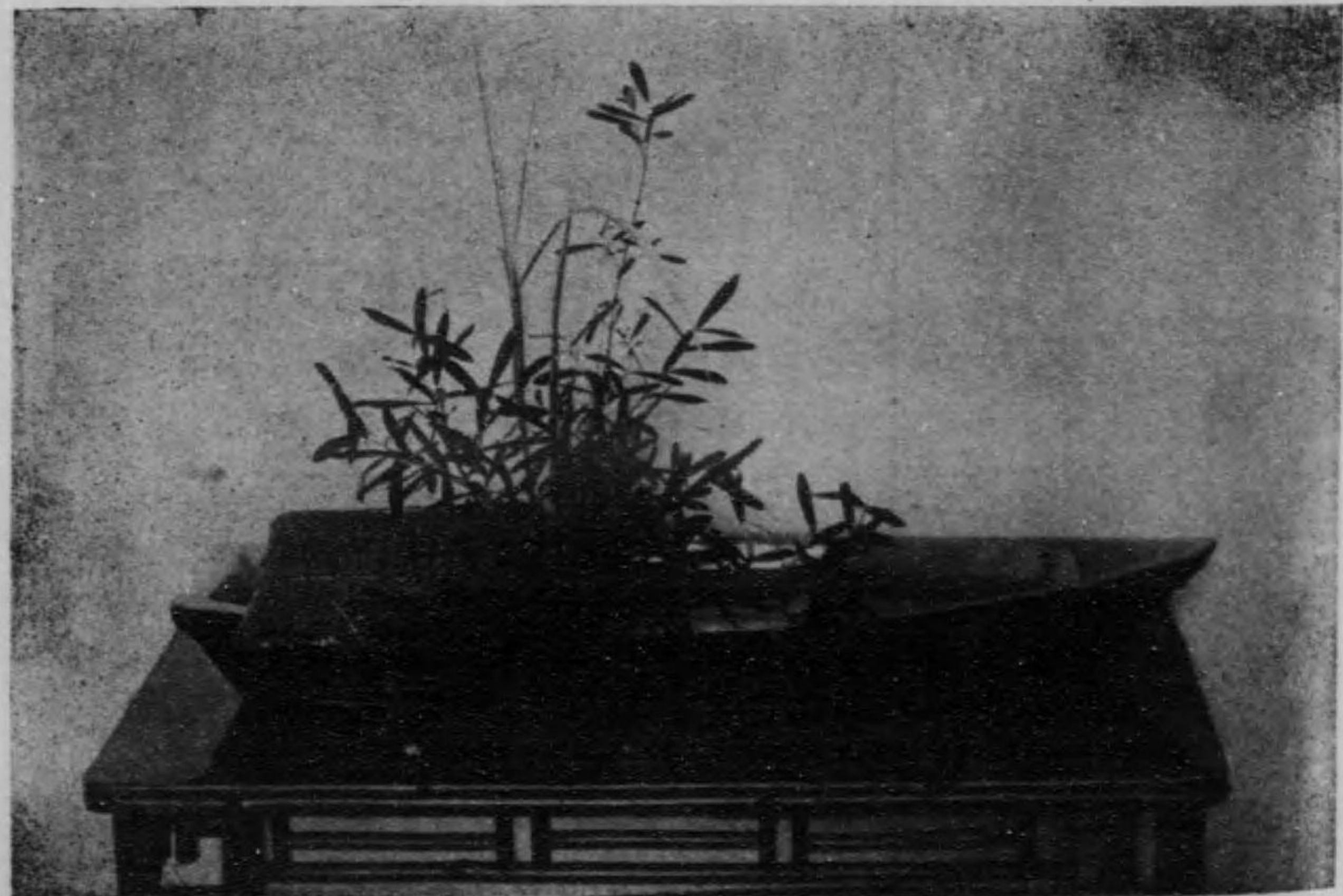
これは詠曲櫻川に因める盛花



色彩本位 被岸穂牡丹葵菜花春蘭



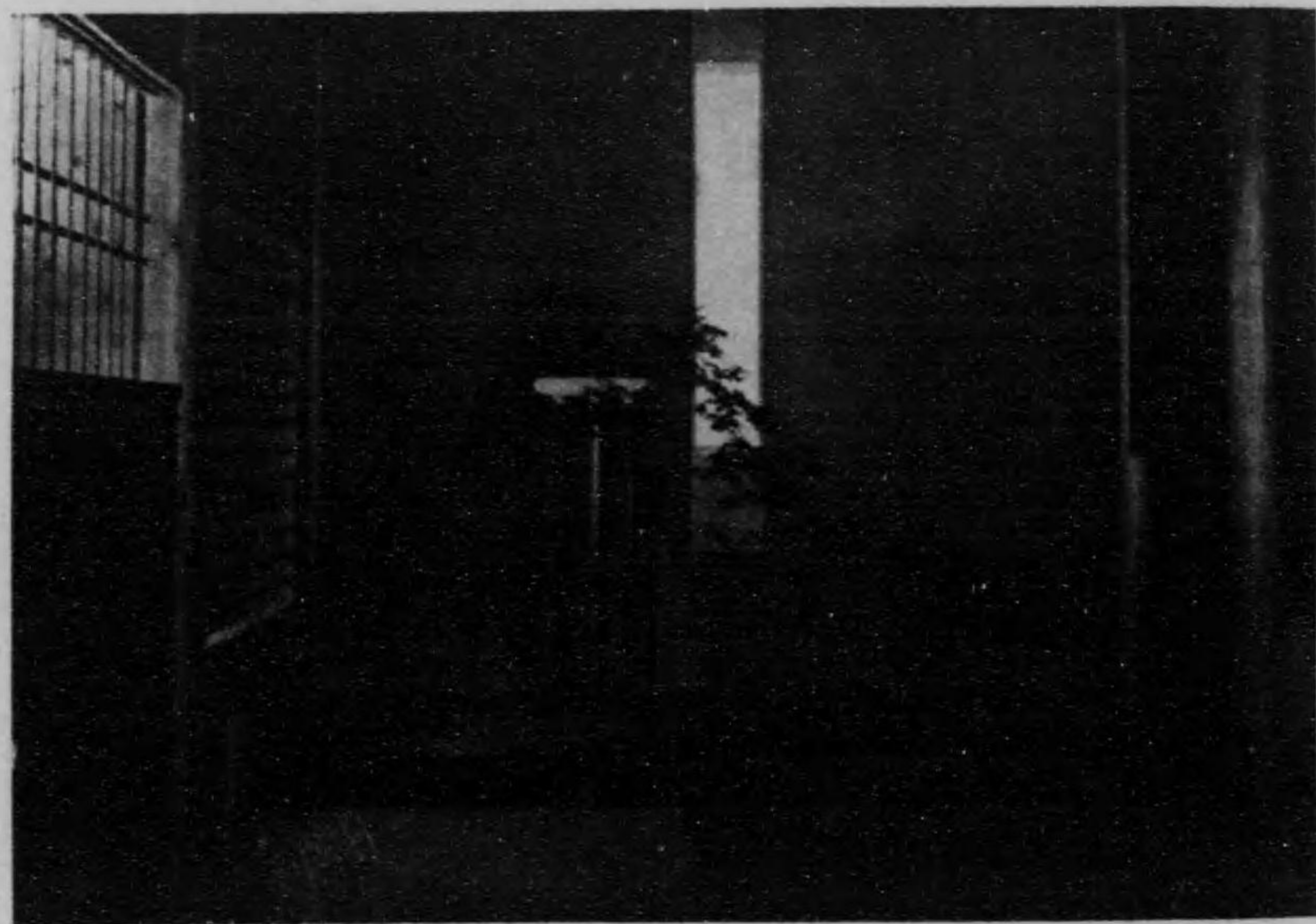
春
杜若 一種



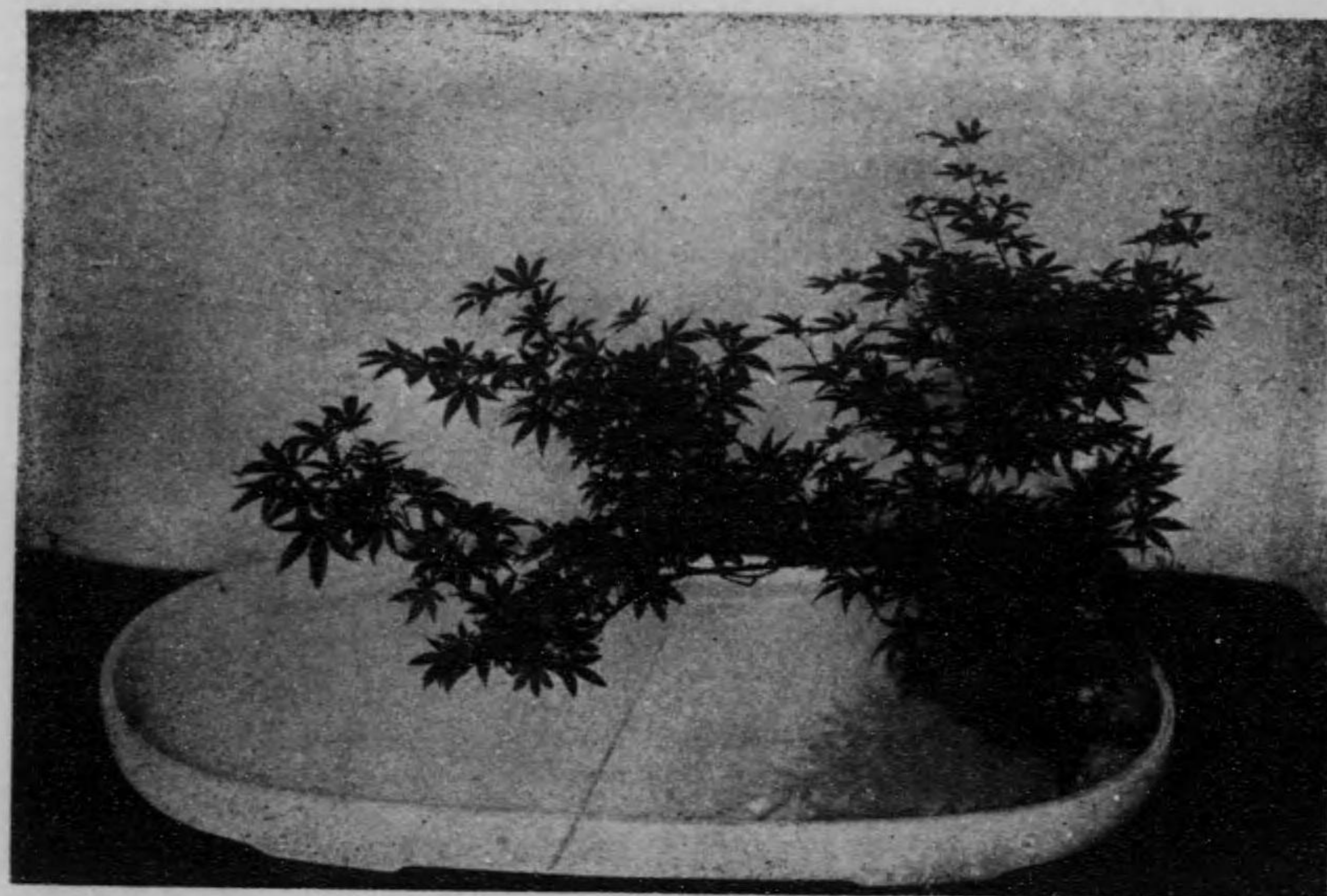
晩春
川ばた柳
若 芦



陽春の盛花
春蘭櫻



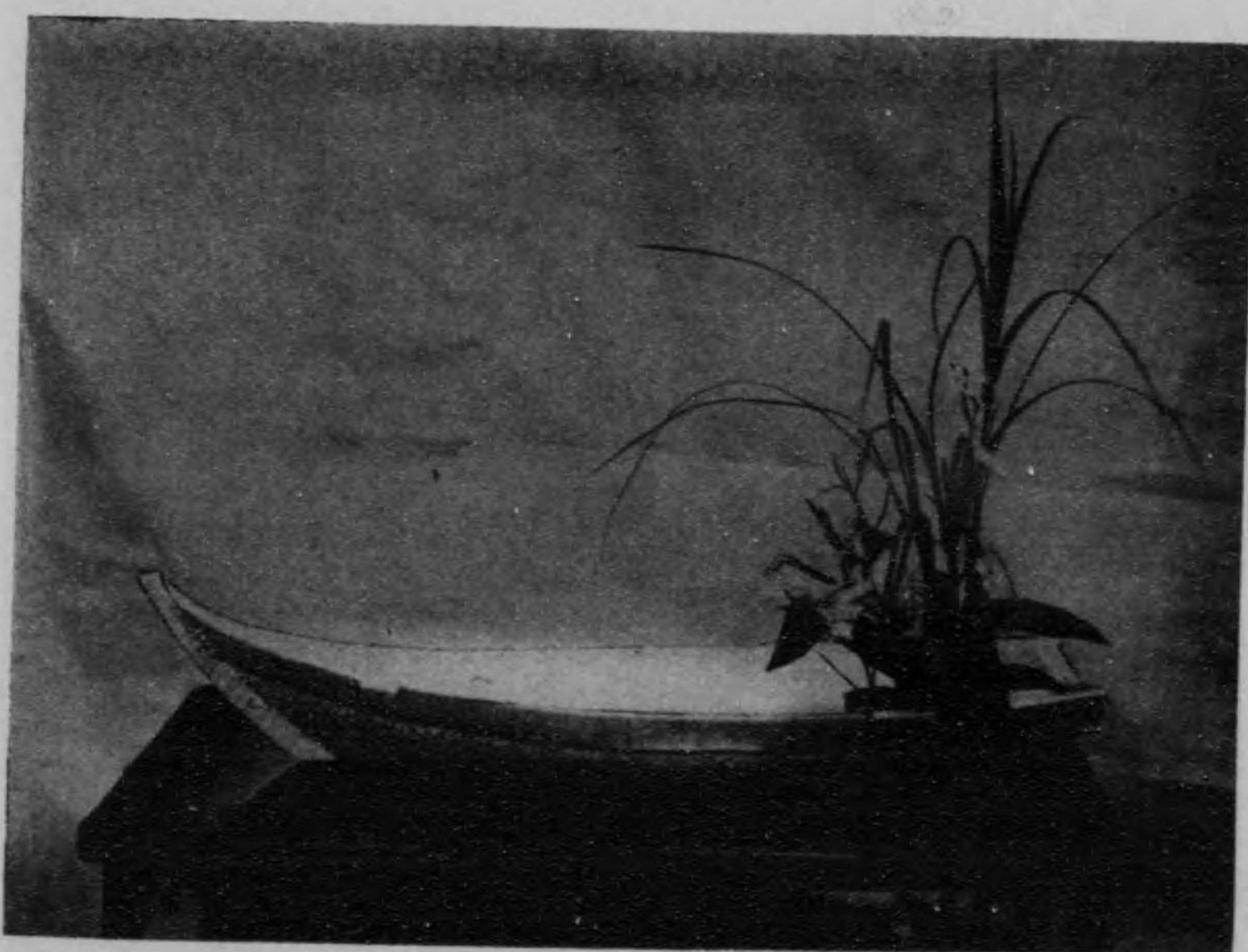
初夏 青葉もみぢ (記事参照)



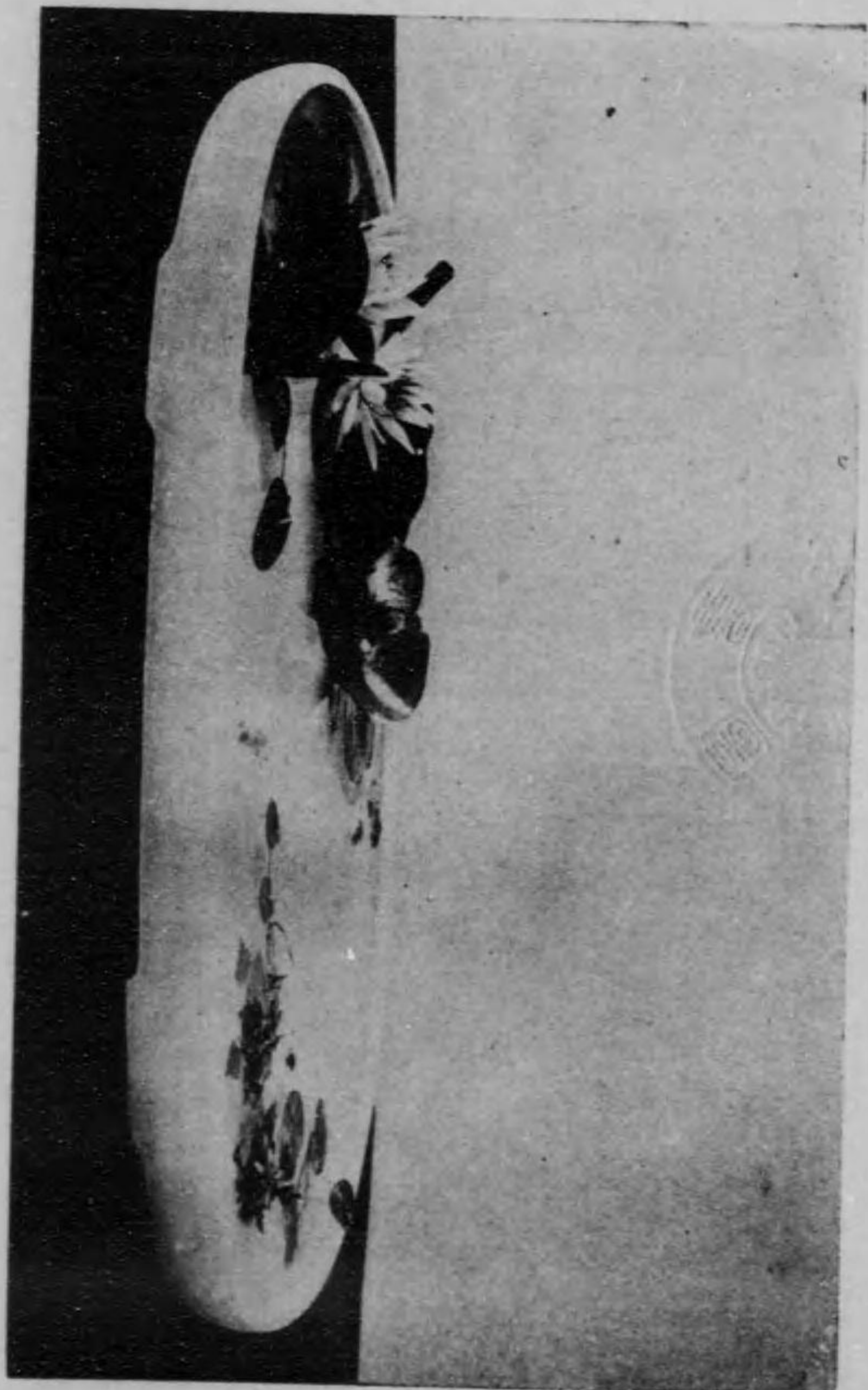
初夏 青葉もみぢ 都忘れ



夏 虫入の芦 たのき藻 河骨 睡蓮 菱



初夏 かるかや 河原撫子 露草



夏
桃黄白 睡蓮三種 浮草二種



初秋
アキ 黄菊 名産の萩



秋
床に置いた盛花 大菊 取合せ三十本



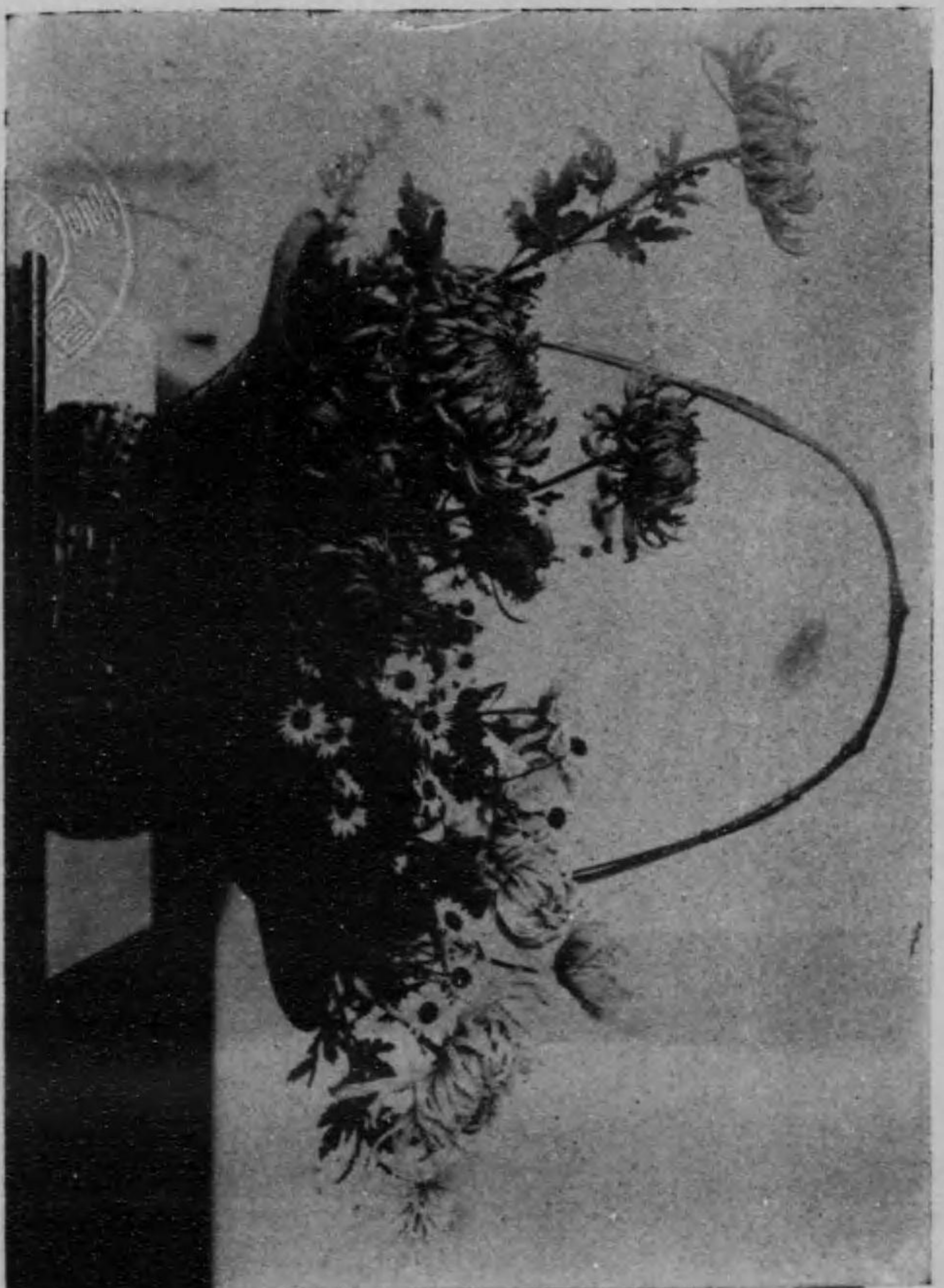
秋
大菊 中菊 小菊 取合せ大活け



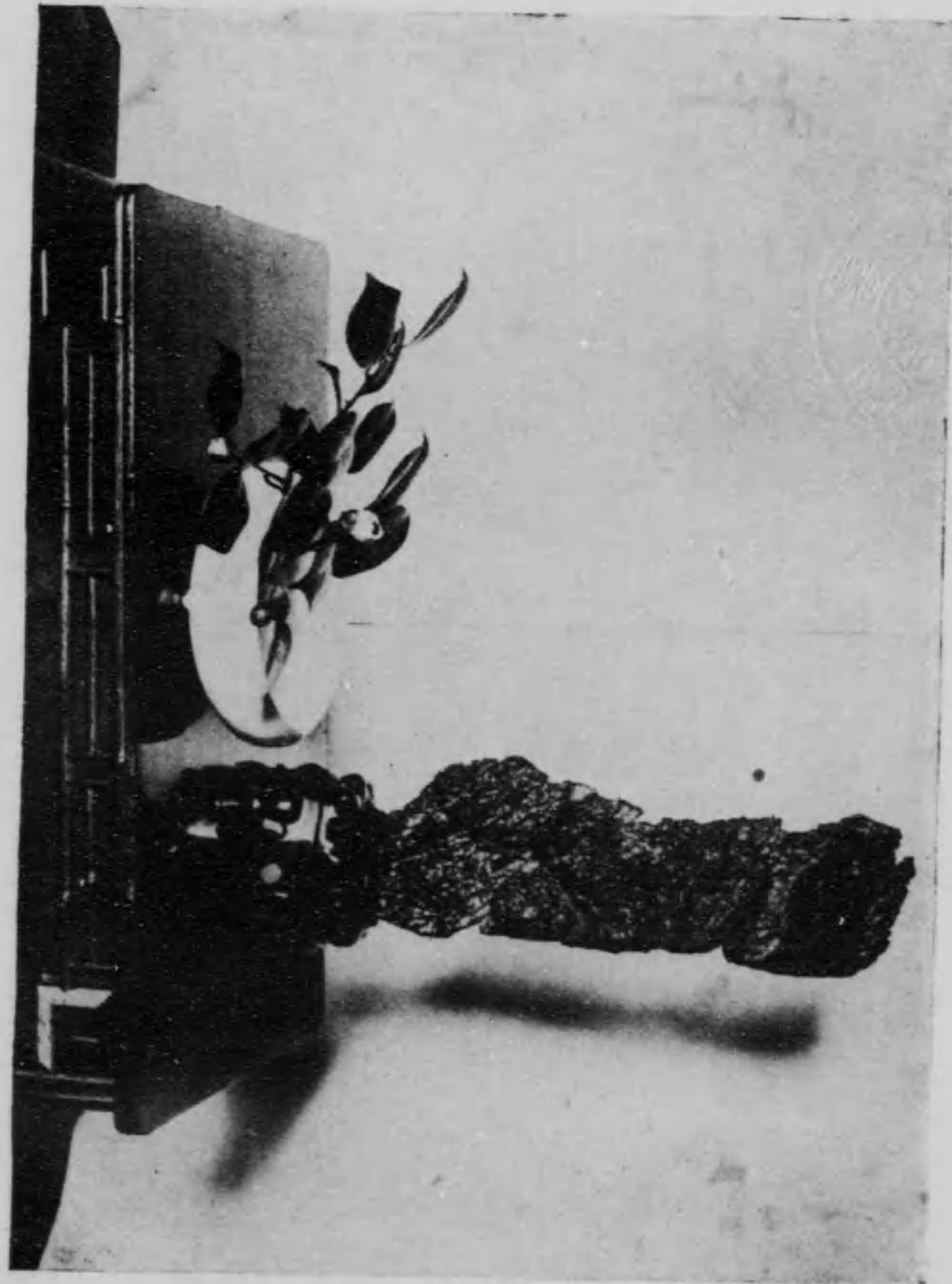
芦 睡蓮 菱 おもたかの水もの、取合せ



秋 にゆき玉 黄菊、神遊「吹上菊



秋 大菊 小菊の大括



「四季」 茶 窓

このたび「四季の盛花」を題して
一書を現はすここに就て

元來盛花は今より二十年以前に企てたものである、その時代には極微々たるものであつた、年月の進むにつれて非常な勢ひで進歩したのである、當時世上に種々の投入盛花の書籍が往々發刊されて居る、どの書籍を見ても参考になるべきものは殆どないと云つてもよい位である、何故なれば配合を見ても缺點だら／＼又活ける方法から云つても決して應用のよほど困難なものみ書いてある、全部を通じて眼を通せば、形容が多くて實際に行ふといふとが少い、又中には文章的に出來てあつて美文なんかを朗讀してゐるやうなものをも往々見受ける、名稱は盛花何々、イヤ早や學びといふ名稱のものをこれまで二三見たことがある。

家元として社會から認められてゐる上は是非共完全なる一書を現すといふことは時世の要求と信じた爲めに茲に『四季の盛花』といふ題の下に發刊することになつたの

である。

二

當時各種の發行ものには生花の濫觴であるとか起源がどうしたとか、東山義政公が飛び出したり、その外歴代の人々を擔ぎ出す書籍が澤山ある、本書『四季の盛花』は濫觴も言はず、變遷も云はず、理屈も云はず、唯々一讀の上實地に四季の盛花を應用の出来る、簡單明瞭のものである、言葉を替へて云へば、坐談的に始まつて坐談的に終るといふのがこの書の趣意なのである。

元來盛花は平民的であつてこれまでの插花は階級的で貴族的で中流以上でのみ行はれて居つたのである、わが盛花は貴きにも賞美され低級の家庭にでも盛んに普及することが出来る、何故なれば一瓶の花をもてば殆ど全部使ふことが出来る、これが第一である、第二には時間の空費がないのである、亦翻れば百花の一時に咲いたる如き盛花をも出来るのである、花屋の手を煩はさずして前栽の一枝を採り、後苑の一本の草花を採つて客を歡ばすことが出来るのである、これが第一の特長である。

目次

盛花の種類並に名稱……………	三
器物並に花止……………	三
器物の寸法並に色……………	四
自然本位の材料採集に就て……………	六
盛花に就ての主なる枝の名稱……………	七
一月の祝花……………	一三
二月の盛花……………	一七
三月の盛花……………	二〇
四月の盛花……………	二四
五月の盛花……………	三〇

六月の盛花	三五
七八月の盛花	四〇
九月の盛花	四五
名月の盛花	四七
十一月の花	五〇
菊花の盛花	五〇
晩秋の盛花	五三
十二月の盛花	五五
盛花雑話	
繪畫應用の盛花	六三
大和中宮寺に於ける田野の盛花	六六
自然應用の盛花	七〇
旅行先で活けた盛花	七四

第一章 盛花の種類並に名稱

盛花は色彩に主きを措いたるものと自然に主きを措いたるものとの二種ある、色彩本位はごこまでも美しく、一年中の百花を一時に水盤或は籠に集めて見たやうなものを企てるのそに色彩の調和美に主きを措くのである、自然の盛花は天地間の大自然を小やかなる水盤中に縮寫して活け上げると云ふのが目的である、總て當時の生花其の他あらゆる挿花は自然に遠ざかる氣分が往々あるのである、成るべく花そのものを自然に接近させるといふ目的で作り上げたのが自然本位の盛花である、色彩本位は自然に就て高く發育するものを低く挿して行く場合もあるのである、それは色に主きを措いてあるからである、亦自然本位は一枝、一葉、一花悉く自然に基いて挿さなければならぬのである、以下章を追うて一斑によく貫徹の出来るやうに現はすことにする。

第二章 器物並に花止

先づ器物は初心者には成るべく安價な水盤、安價な籠が結構であらう、初心者にして器物に拘泥したならば樂みといふよりも寧ろ苦みになつて成功することが不可能である、成るべく初心者は器物に主きを措かず技術の練磨と云ふことが肝腎である、追々技術が進めば百金の水盤、千金の器にでも瀟洒な花をもつて調和さして行くことが出来るのである、すべて器物は技術によつて選ばれる方が得策かと思ふ、先づ最初は水盤が適當だらう、手附の丸籠もよからう、隋圓の水盤もよからう、銅の水盤もよい、一步進めば舟形の籠、瓢も結構である、大の手鉢もよし、大籠もよし、それから花止である、これはアンチモニ製の七寶の花止に限るのである、七寶花止は一つの花止、二つ附、三つ附が適當のものである、尤も大小は器に依つて好まなければならぬ。

四

第三章 器物の寸法並に色

丸水盤	八寸	九寸	尺	尺一寸	尺二寸	尺三寸	尺五寸	尺八寸
小判形	尺六寸	尺七寸	尺八寸	尺九寸	二尺	二尺五寸	三尺	

銅丸水盤	八寸	尺	尺三寸	尺五寸
銅隋圓水盤	一尺九寸	二尺	二尺五寸	
籠手附	直径尺	尺二寸	尺八寸位迄	
漆器小判形	尺八寸	九寸	二尺	
手鉢	直径九寸以上	尺三寸		
舟形	尺六寸以上	二尺三寸位迄		

器物の寸法はこれ位である、その外餘り深いものは用ひず淺くても不可能である、先づ深さは二寸五分位より三寸位のものが適當である、次ぎは色である。

白丸	小判、長角	なまこ丸、角、小判
備前丸		出雲燒 黃丸水盤
青磁丸		丸 眞砂
丸 黒樂		手鉢 黒樂備前燒
丸 空色		八寸より尺位まで

丸	七寶	丸	蕎麥
丸	琉璃	丸	青銅
籠	白寂	漆器	小判
船形	いらば	南蠻	古銅
	樂黑白		水銀銅
			丸
			小判

先づ器物の色彩はこの位のもので結構であらう、この色彩はよほど主きを措いて用ひなければならぬ、花の色によつて器の色彩を替へなければならぬ、一例を擧げると瑠璃の水盤に紅色の花をもつて行けば不調和である、空色の水盤に桃色或は朱鷺を使へば適當の調和である、總て濫い色には濃艶の色彩を採るのが結構である、冴れた色には色彩の淡いものを用ひる方が結構である。

第四章 自然本位の材料採集に就て

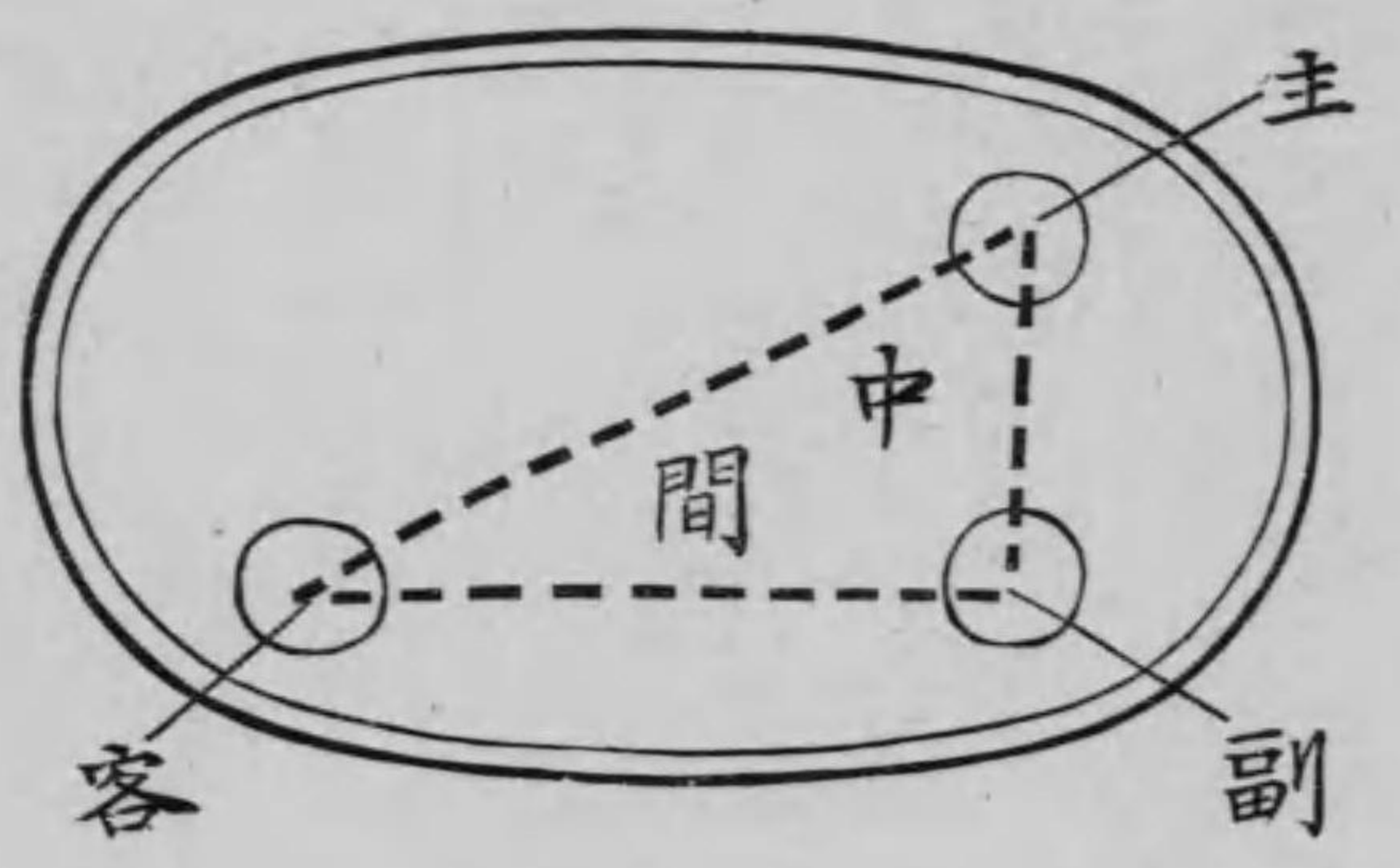
是迄は總て草木を活けるとなれば、花屋の手を煩はして居つたものである、我が盛花は自然本位の材料を得るといへば郊外へ一步踏み出せば、この堤、かしこの池、

向ふの小山などには四季折々の雜木雜草のいろくが無盡藏に生れてゐる、材料を採集旁々自然を研究して一束ね持ち歸つて水盤上に挿せば溪流も挿すことが出来る、池汀の風趣も活けることが出来る、田舎道の情趣も寫すことが出来るのである、却つて花屋に托して材料を採るよりか、春は長閑な郊外に、夏は池汀に、秋は山に、冬は植物園に、四季折々目差した場所へ散歩旁々行けば立どころに自分の好む枝、欲する花を得ることが出来るのである、これは自然の盛花を採集する考へ方法である。

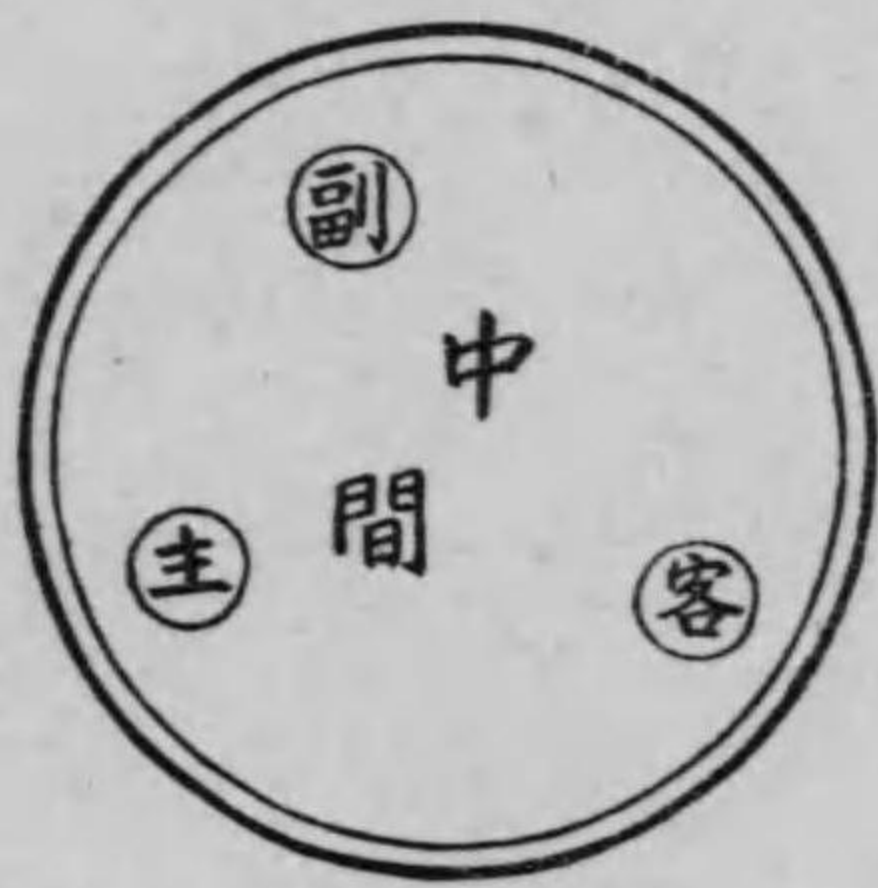
第五章 盛花に就ての主なる枝の名稱

盛花には主、副、客と云ふ三つの役枝がある、木なれば尤も長い枝、尤も盛んなる枝、言葉をかへれば總て力のある枝を云ふ、これ即ち主である、次は副である、次ぎは客位である、副、客位は力同等の枝を選ぶこと、若し草ならば草も同等、主なるものを長く副なるものを中、客位を短いもの、各三種にして初めて主、副、客位と名稱を附するのである、若し三本活けるとすれば以上の通り主、副、客位である、若し五

本を挿せば主に一本、副に一本、客位に一本、残り二本は中間に使ふのである、中間とは主と副との間、主と客位の間を云ふのである、大體は斯う云ふ式によつて活るのである、若し七本になれば主に二本、副に一本、客位に一本、残り三本を中間に、九本十一本、十三本總て奇數に挿すのである、若し三十本以上五十本を挿すとすれば、十本が主である、十本が副である、客位が十本である、残り二十本は中間に高低をつけて使ふのである、如何ほど多數に挿すとても右様の方法にて挿せば簡単に挿すことが出来るのである、若し一步過てば、全體の形は見るに忍びぬほど複雑な形になつてしまふのであるから、餘程此の邊は注意して挿さなければならぬ、これは色彩本位の活け方である、又自然本位は數に於てよほどの差があるのである、自然本位は少數をよしとす、多數は禁物である、技術が段々進むにつれてはわが盛花の本來は千變萬化である、自由自在である、しかしこの千變萬化をよく玩味して貰ひたい、往々脱線することがあるからよく注意するのが肝要である、盛花を活け上げた形は不等邊三角形である、その形を圖に示せば

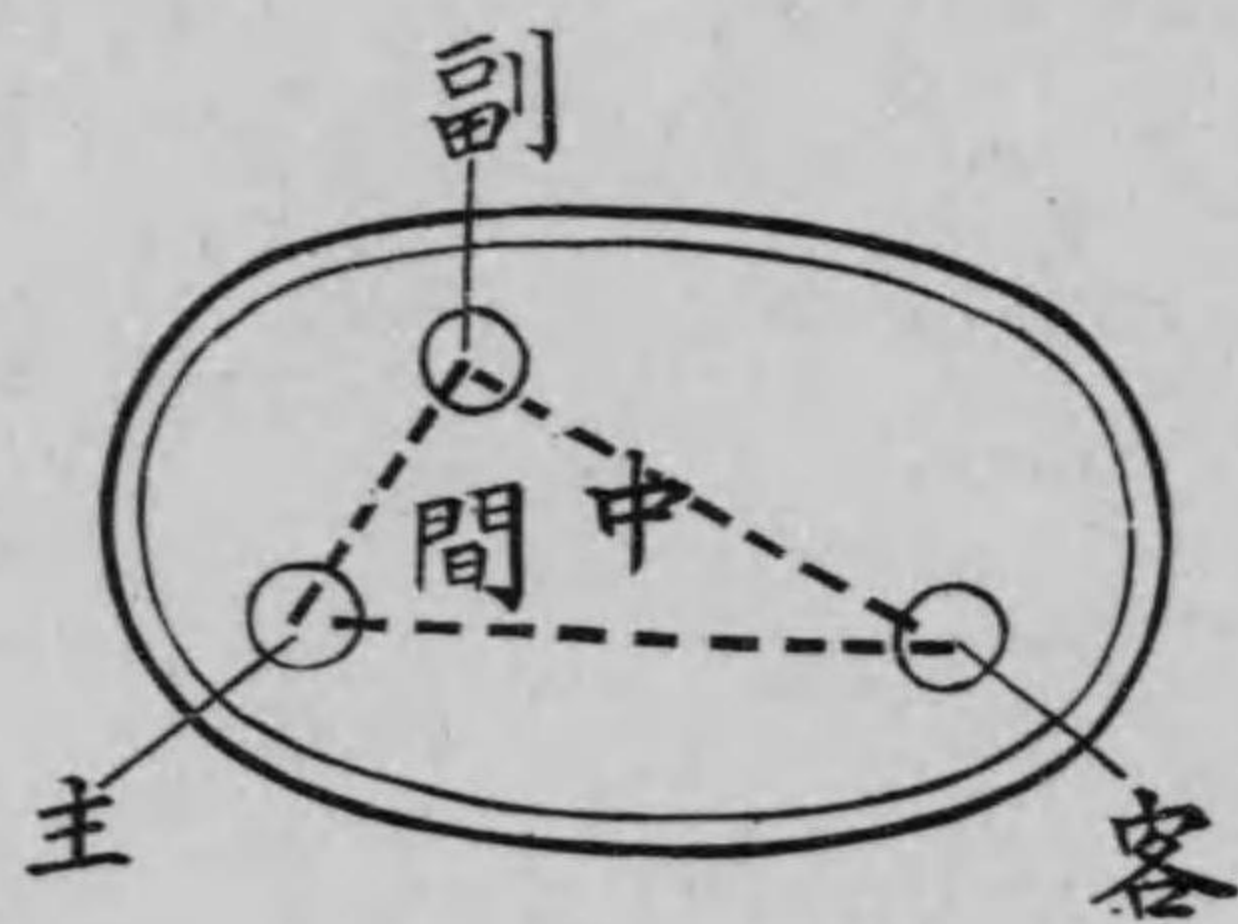


圖に示した活け方は左勝手の花である、主を後づみに使ふ、副を前づみに使ふのである、前づみに客位である。この活け方に對して實物應用を例へて言へば主に松である、副も松である中間に笹である、客位に梅である、即ち之は新年用の盛花に適當の花である自然本位の活け方である、色彩なれば雪柳を主に副に葉牡丹、中間に葵、寒菊、客位に春蘭五種活けである、これも新年用によからう。



この挿の方は主を前づみに使ふのである、即ち本勝手の花である、四月頃の花の豊富な時季の材料を之れに活けるとなれば、

主に鈴掛、中間に牡丹、副にラツバ水仙、中間にヒヤシンス、客位に都忘れ、色彩本位である、自然本位なれば芽出しつゝじを主に副に春蘭、中間客位にした、この花は四月頃の山上の景色である。



この花は本勝手である、水ものを挿すとせう、水ものを挿すならば主に杜若二本、副に二本、中間に二本、客位に一本、都合七本である、これは自然本位である、色彩なればあじさいを主に、副に花菖蒲、客位に百合三本、主に菫、副に姫百合二本、客位に一本、中間に水、これは初夏の溪流とでも云ふべき盛花である。



これは左り花である、主を後づみに副を前づみに又前づみに客位である、大菊を主に五本、副に中菊を七本、中間に小菊見計ひ、中間に中菊五本、客位に中菊五本の盛花である、斯ういふ花は應接の間にふさはしからう。

第五章 春の盛花、一月の祝花

總て正月の祝ひ花は一般によく承知であらうと思ふ、其の芽出度い草木を集めて茲に正月の盛花の配合を云ふことにせう。

材料は第一が松である、第二が梅である、第三が竹である、これは一般に用ひられてゐる材料である、その外福壽草、水仙、寒菊、橘、せんりやう、藪柑子、日蔭蔓、山齒朶、白椿、まんりやう、垂柳、葉牡丹、寒牡丹、薔薇、熊笹、まだこの外にいろいろあるが日本趣味としては先づこの位のものである。

西洋草花であるとい月は總て山野の草花は何れも枯れる季節であるから温室の花を選ばなければならぬ、一般に温室花で新年に賞美される花はボンセチャ(猩々木)、ゼラニウム(西洋葵)、マガレット(八千代菊)その外いろいろ温室で咲いた珍らしい色、美しい花それ／＼配合によつて使つても差支へない。

一、松一式 松は苔附のが結構である、主も老松、副も老松、客位も老松である。

一、松を主に副に白玉椿、椿は二輪位で結構である、客位に松、椿は主の松の影に幽に見せるのを可とす、この白玉椿を使ふには見る人々によつて松上に巢ふ雛鶴のやうにも見わる。

一、松竹梅 松を主に副に、中間に根笹、客位に梅、若しこれを梅を主にするとすれば、小松を中間にする、客位に笹を使ふ。

一、梅を主に副に、中間客位に福壽草である、これは瀟洒な水盤が結構である、次は梅に寒菊、梅を主に、中間に寒菊、客位にせんりやう。

自然本位では

一、松を主に中間に寒菊極少々、客位に梅。

一、白玉椿一種活け、三輪乃至五輪、水盤は八九寸を選ぶ、これは新春小室の花として適當である。

一、南天を主副に、寒菊を中間客位に一尺の丸水盤に活けるのがよい。

一、梅を主副に中間に日蔭蔓、中間中央客位に藪柑子、斯ういふ盛花は軸によつて活

けるのである、古人の句「山里や萬歳おそき梅の花」と斯う云ふ意味の下に挿したらよほど趣味が多い。

和洋折衷の盛花では

一、寒菊を主に中間にゼラニウム、尺の丸水盤がよい、これは色彩本位である。

一、青緋椿、「太神樂」の銘のある椿にてもよし、二輪主に副、客位に寒菊、小室の盛花である。

一、高卓の上に垂れ柳五本乃至二本を垂らし、副客位に白玉椿二輪乃至三輪、これは茶席の盛花である。

一、水仙を主に、中間に寒菊、客位に春蘭。

次ぎに軸によつて挿したる盛花を云へば、新年のことであるからどこまでも芽出度いお軸が結構であるが、わけてこゝに一例したのは雪の曙とでも題したい富嶽の軸である、全山雪を以て包んだやうなお軸が結構である、斯ういふ時に前に記した器物の中の瓢を選びたい、材料は寒牡丹が結構である、二輪がよい、これ以上は却つて折

角の風韻を害する。

又自然本位で活けた小松の盛花では主に小松三本乃至五本、副に二本、客位に一本、中間に一本、都合九本位が結構である、小判形水盤が適當である、松の根元には日蔭蔓を使ふのである、これは前申した富士の軸なれば見る人によつては三保の松原とも見やうし又田子の浦の縮圖とも見ることが出来る、又日の出の軸なれば松島も活けいやすし橋立も表現されやう、こゝらが盛花の特長たるべき自然本位の妙味の存する所である。

色彩本位の和洋折衷の花で同じ一月の花として洋館食堂、日本室食堂、洋館應接室日本室應接室に適當なる花を示せば

一、器は丸水盤なれば尺二寸以上籠なれば大籠が結構である、主に葉牡丹二本乃至三本、ボンセチャ五本、寒菊五本、薔薇五本乃至七本、ゼラニウム三本、マガレット七輪乃至九輪、この盛花は新年の盛花として美麗にして濃艶である、極瀟洒な花では葵を二本主副に中間客位にマガレット八九寸の水盤が適當であらう。

次は葉牡丹を主に中間副に寒菊、客位に春蘭、直径尺位の手附の籠が結構であらう斯ういふ盛花は經費の点から云つても手數から云つても一般的の應接食堂には至極適當で簡單にして奇麗な花である。

一、薔薇、葵、マガレット、雪柳、ボンセチャ。

一、マガレット、ゼラニウム、薔薇、寒菊、春蘭、この花は和洋折衷である。

この外にまだいろいろ配合澤山あるが紙數の制限があるから一月はこの位におくことにする。

第七章 一月の盛花

次は二月の花である、まづ二月は梅本位と云つてもよい季節である、新年の盛花も梅を應用するといふことは申してあるが、實際の梅の季節は先づ二月であらう、二月の月は材料もよほど乏しい季節である、梅について少し自然本位を記さう。

梅を主に春蘭を副、客位に中間に似た、この花は自然本位である、もしこれを關西

で連想するとすれば、先づ月ヶ瀬と見て然りであらう、先年月ヶ瀬に遊んだことがある、兩岸に梅林を見て真中に澄み切つた水が流れてゐる、斯ういふ有様を縮寫して小判形の水盤に活ければ大變よからう、主と客位の中間に流を使へばよからうと思ふ、すべて全國の知名の梅の名所と云ふとで此花を挿したならば水なきところを縮寫すれば、下にしだを一面に使ふ、又水あるところを縮寫すれば、兩脇に分けて活けるのであつてこの梅の名所でも描き出すことは出来るのである、これはわが盛花の特長とする所である、斯う云ふ盛花をするときは圓水盤は不可能である、小判形の成るべく大きなのが結構である、尺八寸以上三尺までがよい、同じ自然本位でも瓢のやうな器に挿すとすれば梅を主副に中間客位に春蘭の實をつかふのである、これは二種の活け方である、極瀟洒な花であるから場合によつて茶席において差支へない、尤もこの自然本位の梅をさすについて平地を連想する時は日蔭蔓をつかふのである、山を連想する時はしだをつかふのである、これはどちらも同じ山に出来るものであるが、日蔭蔓をつかへば平地と見ることが出来る、實地に兩方を活けて見れば尤もと首肯くことが

出来るのである、又同じ梅を主にして中間客位に早咲の菜種の花、ゑんごうのやうなものを使つてもよい、同じ自然本位でも寧ろ里といふ考へで活けた方がよい、梅を主に水仙を副に中間客位に寒菊、これも二月の盛花としては適當である、梅の盛花はこの位にして次ぎは色彩本位の花を記さう。

一、サンシウに葉牡丹、金仙花

一、葉牡丹、金仙花、ゼラニウム、フリジャ、春蘭

一、サンシウ主副中間に客位に椿、これは紅である。

一、ゑんごうに寒菊これは極瀟洒な水盤がよい。

一、フレジャ、ゼラニウムこれも同じく瀟洒な水盤が適はしい。

一、椿の紅白、白を主副に中間客位に紅色、瓢の器が適當である。

一、葉牡丹、サンシウ、マガレット、ゼラニウム、春蘭これは手附の大籠が結構である、この月の中にあつて色彩本位として尤も美しい花である。

一、雪柳、葵、マガレットこれは銅の水盤が結構である、尤もこの中の雪柳にサンシ

ウは總て温室のものである。

この外温室の材料はプリムラ、シチンシス、(八重の櫻草である) プリムラ、オボコニカ (これは一重の花である)、次に色の調和を記さう、葵の朱鷺、マガレットの白、アスバラカスの緑、斯ういふ配合で空色の水盤に活ければ随分美なものである、假にプリムラシチンシスが赤なれば、マガレットを用ひるのである、マガレットを主に中間客位にプリムラをつかふ、又客位にフリジャを使つてもよい、この花は淡黄であるクリーム色と云つてもよからう、香氣の高い花であるから餘り澤山つかはない方がよい、早ければシテラリヤもあるであらう、スキートビーもあるであらう、アチモチもあるであらう、シクラメンもあるであらう。

日本花では牡丹もあらう、牡丹があれば紅白二輪がよい、これ以上つかつてはいかない、これらは何れも温室咲の花である。

第八章 三月の盛花

三月の季節は地方はまち／＼であるが、都會ではこの月に雛祭をするのである、先づ雛の節句として昔から定めてあるは桃の花である、桃の花も新曆の三月には咲くものでないのである、何れも多少温室の厄介になつたものである、その桃の中で盛花に應用の出来る桃と出来ない桃とがあるのであるから少し桃に就て話をせう。

白桃單瓣のもの成るべく桃は小枝の多いのが盛花には結構である、この白桃は大阪附近では高石桃と云ふ名がある、この桃の中には随分流儀に用ひるやうな眞直の枝が澤山あるのである、その中で尤も前申した通り小枝の多い桃を利用すれば使へるのである、次ぎは桃色單瓣の花である、これは前同様のものを用ひるのが結構である、桃の花は大輪で美であつても直な枝は盛花に禁物である、何故なれば、棒立の枝は如何にして見ても枝の如く活けいかすことは困難であるからこれは選ばない、白桃を主に選べば、副中間に赤椿を、菜の花を客位、これは雛まつりの花としては簡單にして適當であらう、桃色の桃を主副に選べば、白椿を中間につかふのである、客位に金仙花を應用する、これもよい配合である。

この外に八重の桃で、桃色の大輪咲がある、これは大阪地方の花屋では俗に「アメンド」と云ふ名をつけてゐる、その外水蜜桃の花もよからう、白の八重の桃の花も結構である、これは俗に「お多福」といふ銘がついてゐる、又桃色で聖王母といふ名の花もある、その中白の「お多福」といふ桃は徑二寸位あつて咲けば随分美事である、斯ういふ桃は餘り澤山さゝないで三本乃至五本がよからう。

桃で自然本位といふことになれば、俗に「たゞも」といふ名がついてゐる、この桃には随分面白い枝が澤山ある、斯ういふ桃を主につかつて日蔭蔓を中間につかつて客位に菜の花をつかうて活ければ平地の桃畑を連想することが出来るのである。

その外に桃についての配合をいへば八重の桃を主に中間に菜の花、客位に春蘭。

白の八重の桃を主、副に中間客位にサイフ椿をつかふのである、これは二種の活け方である、このサイフ椿は紅に白の斑が入つてゐるので椿としては美しい花である。

桃はこの位におかう、その他の配合をいへば、

一、乙女椿を主副中間に菜種客位の二種、之は小水盤が結構である、乙女椿は桃色の

椿である、斯ういふものを選ぶには水盤の黒みを帯びたのが結構である、何れも椿は温室である、又その外に矢張り温室で唐桃といふ桃がある、この桃は小枝の澤山ある桃で、これには白と桃色とがある、先づ盛花に桃と云へばこの桃が一番適當である、白の唐桃を主にゑんどうを中間に客位に赤の椿も結構である、椿は成るべく二三輪花の咲いた分をさゝなければならぬ、又これは自然本位の桃である、唐桃の桃色を主に、副に青麥を少々、客位に早咲の蒲公英をつかへば結構である、斯ういふ風な盛花を活ければ季節は少し早いかも知れないが、雲雀などのことを連想することが出来る

一、青麥を主にゑんどうを中間客位に斯ういふ花は瀟洒な手附の籠が結構である、また材料を得ることは一步郊外に踏み出せば、容易に採集することが出来る、さういふ場所では採集をして活け上げたなれば一層趣味が多いかと思ふ。

彼岸櫻を主に、この材料も多少温室の關係がある、金仙花を中間に椿を副にゑんどうを客位に中間に菜の花、日本趣味の花としては美しい五種の盛花である、季節であるから雛の軸を一幅應用せう、もしこの軸は桃をあしらつた立雛の畫である、高卓を

用ひるのである、その上に高卓の大きさによつて丸水盤を定める、垂柳を五六本を主に副客位に白の椿、軸の色彩が濃艶であるから盛花は斯う云ふ時には成るべく淡い色彩が結構である、垂柳の緑、椿の白、軸の桃の花は桃色である、雛は土佐風の立雛である、確かに花ごの調和は此れ以上ない、連翹を主にサイフ椿を五輪、これも圓水盤に高卓が結構である。

第九章 四月の盛花

四月は一ヶ年中の花の季節である、各種の草木は山、野、畑、庭、總ての草木が満開の季節であるから、花は實に豊富である、先づ第一に櫻を選ぶ、この櫻に自然本位と色彩本位の挿し方がある、櫻には種類が随分澤山である、その中一二種は盛花に應用出来ない櫻がある、何故なれば長く垂れた櫻、その外俗に牡丹櫻といふ櫻は禁物である、この櫻は蕾のうちには少々應用しても差支へないが満開の季節になると、一見手毬のやうに咲く花である、色彩本位からいへば、その外各種の櫻を使つて差支へない

自然本位の方から見れば矢張り山櫻が結構である、櫻のうちで一番早く咲く櫻は阪地では「山科」といふ櫻である、單瓣にして葉と花ごが一時に出るのである、この櫻が適當である、その外吉野櫻、芝山櫻、鬱金櫻といろくあるが、鬱金櫻は一番櫻の終りに咲くやうに思ふ。

前の山科を主副に、これは一本に見立てるのである、中間に水を見せて客位に春蘭三種活けである、これも梅の配合の時に云つた如く全國の櫻の名所を連想することが出来る、山の櫻なれば齒朶である、平地なれば日蔭蔓でよくこの趣が出る、總て櫻を活けるのは下に開いた花を使ひ、上に蕾を使ふのである。

櫻を主、副に小松、中間に齒朶、客位に蘭、これは水盤の三分の一を水を見せるのである、矢張流といふ氣持で活けなければならぬ、これも自然本位の花である、一寸餘談に走るかも知れないが、櫻から連想して趣味的の話がある。

昨年四月であつた、丁度櫻季節である、社中の盛花熱心のさる夫人が主人同道で吉野へ行かれたことがある、吉野で主人はかしこの景色、此處の花を眺めつゝ、ズン

ズン登つて行かれる、夫人は一步遅れ二歩遅れ、次第々々主人に遠ざかつた、丁度西行庵のところで主人は夫人を待ち合はされた、やがて夫人は兩手にさまざまの材料を採集してニコ／＼と歡びながら後より主人に追いつかれた、主人は斯う云ふところでそんなものを採集しては手荷物になつて迷惑な話である、少々お小言があつたが夫人は平素は塵煙に蔽はれる都會にあつて自然に生れた齒朶や蘭は見る事が難いのである、その時の夫人の心は大きく云へば、年頃尋ぬる敵の首でも得たやうな氣持で採集されたのであつた、これらの花を手にして山を下られ麓で吉野の櫻をみやげに買つて歸阪せられた。

丁度歸られると直ぐ主人の御來客があるとのことで、採集されたいろ／＼の材料をもつて小判形の大水盤に自然本位の盛花を早速試みられた、來客は季節に適合した花の珍らしさ美しさに吉野を目のあたりに見るやうな思がすると來客は非常に激賞された、即ち一枝一葉悉く吉野山中のものであつて活けられたのであるから「吉野みやげ」と云ふべき盛花であるとの話に一層興が深かつたとのことであつた。

梅、櫻、自然本位の盛花を活ける人は斯うした趣味で挿したなれば客も歡ぶであらうし、挿す人も満足である、その活け方は吉野櫻を主に根元に春蘭二本、これは花をつかつてあつた、それから客位に一本の外は全部齒朶が使つてあつた、これは水を一寸も見せてなかつた。

山櫻を主に少し離して副に櫻、客位に櫻、全部日蔭蔓、主の根元に都忘れ三本、中間に二本、客位に二本、これは三種の自然本位である、これは平地の櫻の活け方である、斯う云ふさまを水盤に活ければ、東都などでは、いろ／＼名稱を附し又中央に水を見せれば小金井も活けることが出来る。

次は色彩本位にせう。

色彩本位には櫻を餘り多く使はない方がよい、山櫻を主にヒヤシンスを中間にケマンサウを客位にこれは和洋折衷の三種の盛花である。

鬱金櫻を主に次にアチモ子、フリジヤを客位にヒヤシンスを中間に、副に春蘭、これは籠が結構である。

櫻を主にこれは山櫻でなくてよい、ゑんごうを客位に都忘れを中間副に、これは自然本位と見てもよし、色彩本位と見てもよい、主の櫻が櫻色、中間の都忘れが紫、客位のゑんごうが白、季節として淡い色彩である、ガンソクを主に中間にペラコニウム（俗に一季葵といふ）都忘れを客位にこれは圓水盤がよい。

櫻を主に露の臺を中間客位にこれは二種の自然本位である、ゼラニウムを主にメーシューツサース（西洋のラッパ水仙）五本、アチモ子を客位に、雪柳を主にチューリップを次ぎにヒヤシンスを前づみに中間にマガレット、その前にアチモ子、副に黄水仙、客位に都忘れ小判、圓の大水盤、又大籠に活けるのが適當である、色彩本位として尤も四月中での奇麗な花である、斯う云ふ花は洋館の應接、洋館食堂も結構である、日本室なれば蝶のお軸をかけてほしいものである。

吉野櫻を主に都忘れの二種、尺一寸の白水盤が結構である。
自然の山のもの、活け方を云へば、

松を主に、副に山櫻少々、中間に芽出しつゝじ、その外芽出しであれば結構である、

中間全部に齒朶、春蘭客位、斯う云ふ花には櫻は松の後に幽かに見せる方が趣がある。早咲き自然の牡丹が出る季節である、鈴掛を主に次に牡丹、黄水仙を副に次にヒヤシンズ、アチモ子、チューリップ、都忘れ、マガレット、櫻を客位、これは九種の和洋折衷の色彩本位の大盛花である、二尺以上の小判形にお活けになれば結構である、牡丹二本紅白を瀟洒な水盤が結構である、乙女椿を客に黄水仙を客位に、鈴掛を主にチューリップを中間にヒヤシンズを客位に三種の色彩本位。

藤の白、紫の二種、これは高卓から少し垂らして活ける。

次ぎは木蓮（白）牡丹を副、中間、客位の五輪、これは手附の籠が結構である。雁足を主に都忘れを中間客位に小水盤、次は水もので云へば、

杜若を主に二本、客位に一本、中間に花なしの株、二株、副に一株、都合五株である花を低くこれは小判形が結構である、杜若は追々夏季の花盛になれば種々に使ふ。

芽出し紅葉を主に中間に葉牡丹、客位にヒヤシンズ。
牡丹、黄水仙、マガレット共に色彩本位。

春蘭を主に日蔭蔓を中間、副客位に都忘れ、これは自然本位である、斯う云ふ花には櫻の軸を用ひて欲しい。

その外配合は種々あるが大同小異であるからこの位にしておいて色彩本位の盛花、自然本位の盛花は寫眞と照合して貰ひたい。

第十章 五月の盛花

この月は矢張り四月と同等で花の豊富な季節である、一箇年中で四、五の兩月は色彩本位の盛花の最好季節と云つてよい。

色彩の花に先つて牡丹の盛花を云はう。

牡丹は一月にもあり又四月にも一寸書いて置いたがこの月は牡丹の開花の季節であるからその配合を云はう、

牡丹には往々花頭のやうな短いのが澤山あるが、これは長い花と交せて使へば結構である、又主に外のものを選んで中間、客位に使ふこともある、牡丹を瀟洒に盛れば

先づ二輪である、白を高く淡色或は紅を低く、手附の小籠が結構である、又外の花を副はすとすれば、牡丹二輪を主副に中間客位に小田巻草もよくこれは紫である、斯ういふ配合で盛つてもいゝのである、季節であるから牡丹のみを盛るとすれば随分澤山盛ることが出来るのである、七輪乃至十一輪、十五輪以上五十輪位まで斯ういふ盛花をする時は半開を主に咲いた分は中間に客位は蕾である、その色彩は白を高く淡色を副に紅を中間に客位に牡丹色但し蝦茶のやうな濃い色が結構である、すれば大きな籠に二三十本も活けたれば、實に香氣馥郁として美の極である。

尤も牡丹は葉に主きを措かなければいけない、葉に注意して活ければ葉隠れに咲いた花を見せ、葉の上に蕾を見せる方が結構である、器は小判も結構である、手附の大籠も結構、瓢もよし、銅の水盤も結構である、大きさは花の數によつて選ばなければいかぬ、若しこれを瀟洒に活けるとすれば、木を一本使つてほしいのである、これは主に使ふのが結構である、牡丹は是位にして杜若に移る。

杜若を主副に三本、中間に二本、客位に二本、都合七本、これらは季節としては水

もの、中で美しい花である。

カーラを主にこれは一名ラツバ草といふ花である、これを主に副に三本、中間に杜若を二株、客位に一株、花一本、又中間に一株、花一本、これは小判形の一尺九寸以上、二尺位の水盤が結構である、杜若を主に縞芦を副に客位に早咲きの睡蓮、これは丸の大水盤が結構である、銅の水盤もよろしい。

杜若を主副へに客位に都合三本、中間に浮草、この器は小判形一尺五六寸のものが適當である、杜若はこの外初夏から暑中へかけて種々使ひ方もあるがそれは追々云ふことにする。

杜若の葉の使ひ方は總てどの株も前は三枚組である後は二枚組である、これはよほど注意して活けなければならぬ。

杜若は元來四季に咲くものであるから三月から十一月位まで杜若があるのである。季節の花を云はう、

夏菊を主に小田巻草を中間に石竹を客位にこれは小水盤が結構である、そけいを主

副に中間客位に撫子、これは小判形が結構である、少し後づみに活けて貰ひたい、うつぎを主に夏菊を中間に姫莞草を客位に、自然本位としてはつゝじを主、副に中間にも齒朶、客位に撫子、小の器が結構である、紫陽花を主に新菊の花を中間客位に、副に菖蒲、これは手附の籠が結構である。

芍薬を主に金仙花を中間に客位に撫子、姫莞草を主に撫子を中間に、姫莞草を主副に客位に撫子、小水盤がよろしい、卯の花を主に白の撫子を中間に小田巻草を客位に、紫陽花を主に早咲きの菖蒲、白、絞り取り交せ五本副に客位に紫陽花、中間に姫百合、自然本位では、

夏櫛を主、齒朶を中間に客位につゝじ、これは小判形がよい、薔薇(クリーム色)を主に淡桃色を副に客位に姫莞草、早出の薔萱を主に副中間に姫百合、客位に齒朶、これは水盤小判形二尺以上が結構である、一面に齒朶を使ふのである、薔薇を主に金魚草を客位に中間にマガレット、マガレットを主、副にフロックスを客位に、ゴールドンフラワーを主に中間に金魚草、客位にマガレット、カルセオリヤー(巾着草)を

主にペコニヤを客位に中間マガレット、ヘリオトロープを主にシテラリヤを中間に、グリサンセマームを主に客位に、ゼラニウムを主に中間にペコニヤ、客位に薔薇、これは色彩本位の西洋草花である、デンドロビウムを主に副にランタナーを中間客位にこの花は一名七段花と云ふ花である。

芍薬の白三本を主に淡色五本を中間副に客位に紅、手附の籠がよい。

繡球花を主に中間に葵、客位に姫莞草、莞草を主に中間客位に薊、紅が結構である、この器は瓢がよからう。

菖蒲紫を五本主に絞り五本副に中間五本、淡色五本を客位にこれは大水盤が結構である、この月は勇ましい五月節句の季節、節句の花としてはこれらが適當である、この外菖蒲は三本以上五十本までも挿すことが出来る。

お節句の盛花としてお軸に對する花を云へば鍾鬼のお軸をかけたとして菖蒲を主に薊を副に客位に蓬、器は丸水盤、銅の水盤もよい、薊を主副、客位に小水盤がよからう、總てこの邊の花はお節句の盛花として實に適當である。

お節句に就ての床飾りを一寸記しておかう、

土佐風の宇治川先陣の二幅對のお軸には中央に縞桐の平卓、白の白高麗の獅子の香爐、書院には太刀飾り、違ひ棚の隠元禪師の書の巻物、これに對する棚下には銅の大水盤に紫絞り大輪の花菖蒲を二十五本も挿してある、これは本式の床飾りの一部である、これら床飾りを畧すれば随分簡單にいろくゝと出来るのである。

第十一章 六月の盛花

六月は初夏の盛花である、石榴紅白を主副に紅を客位にこれは銅の一尺二三寸の丸水盤が適當である、この石榴は成るべく八重の花が結構である、一名花ざくろといふものである一重のものは活けては面白くないから、この八重咲を用ひるのである。

白百合を主副に姫百合を中間客位にこれは尺位の丸水盤が結構である、かんぞを主に三本、葉を見計ひ花を高く葉を少し低く客位にかけださう、中間にシヤスタデジ―五輪乃至七輪、ガク草を主に夏すかしの百合、これは赤茶のやうな色である、これ

を中間客位に、石竹を客位に、次ぎは紫陽花を主に夏すかし百合を客位に中間に姫百合、主、副に姫カンゾ、客位に薔薇、尺位の丸水盤、じうそひらを主に中間副に八重の芍薬（俗に牡丹咲）五本、客位に姫かんぞ、そけいを主に撫子を中間客位に小判形二尺の水盤後づみに、菖蒲を主にデジを中間に客位に都忘れ、丸水盤が結構である、そけいを主に中間に薔薇、次に芍薬、次にデジ、客位に姫かんぞ、手附の大籠が適當である、色彩本位の盛花である。

かんぞを主に三本、葉を見計ひ花を高く葉を少し低く客位にかけだいさう、中間にシヤスターデジ一五輪乃至七輪、ガク草を主に夏すかしの百合、これは赤茶のやうな色である、これを中間客位に石竹を客位、次ぎは紫陽花を主に夏すかし百合と客位に中間に姫百合、主副に姫かんぞ、客位に薔薇、尺位の丸水盤、じうそひらを主に撫子を中間副に都忘れ、ルビナスを客位にこれも手附の籠が結構である、姫百合を主副に中間全部に齒朶、客位に姫百合一本、斯ういふ盛花は自然本位である、器は大水盤が結構である、二尺以上二尺五寸位、斯ういふ盛花をして初夏の溪流或は山上の氣分を

表現するのも興がある、水を豊富に見せれば溪流である、水を少しく見せれば山上である、初夏の自然本位の盛花としてこれ位氣の利いたのは少いのである。

じうそひらを主に紫陽花を中間に撫子の紅、ルビナス、都忘れ、芍薬、薔薇、菖蒲、二尺位の小判形に成るべく艶麗に活けるのである、追々暑さに向つて行くから斯ういふ風な色彩本位でも最も美しいものは先づ六月の季節である、これから先七月八月の季節にも色彩本位の盛花はあるが成るべくこの五月に斯ういふ風な花を活けて見る方がよからうと思ふ、簡単に云へば色彩の名残りと云つてよからう。

暑中の盛花は成るべく涼趣を發揮せねばならぬ、随つて其の材料を瀟洒に使ふ方が結構である、若し暑中に色彩を活けるとすれば、その色彩は成るべく淡い色を用ひるのがよい。

石榴を主副に中間客位に露草、露草を主副に姫百合を客位に、これは水盤が結構である、少し季節のおくれた紅ねんごうを主にマガレットを副客位に九寸位の水盤が結構である、大山蓮を主にこれは白の花、非常に香氣が高い花であるから二輪乃至三輪

が適當である、絞りの撫子を中間客位にこれは手附の籠でもよし、水盤でもよし、瓢でも結構である。

三八

マガレットを主副にゼラニウム（桃色）中間客位に小水盤に總體初夏から暑中へかけての活け方は水盤中に水を見せるのが適當である、自然、色彩両々共である、そのうち澤山の色彩はその必要はないが瀟洒なものはずべて水を見せる方が適當である、又水草などは出來得る限り水を餘計に見せるといふ考へで盛る方が適當である、これが初夏から後へかけての活け方である。

次は水ものである、白竹を主に河骨を中間客位に中間に菱を少々三つ又は五つ二尺位の長角の水盤がよからう、縞のつくもを主に杜若を中間に客位に睡蓮、この活け方は寫真に示してある。

この季節は杜若の盛りの季節であるから杜若の盛花を話さう、

杜若一種活けとなれば大水盤に花七本乃至九本位使つても差支ないのである、何れも蕾、中咲、満開の三種を調和よく使ふのである、これも寫真で示すことにする。

縞芦を五本主に杜若を二輪中間に客位にカラー、これは銅の丸水盤がよい、水ものは籠には總體禁物である、往々世間で水ものを籠に盛つてあるのを見ることがある、これは少し不適當である、矢張水ものは圓水盤、長角、船形、小判形が適當であらう。

川端柳を主に中間に蘆、客位に河原撫子、これは船形が結構である、葉櫻を二本主に成るべく小さい葉が結構である、しだを中間前づみに又中間に蹲躑少々、水盤中の後づみに活けるのである、斯ういふ風な花は自然から見た急流とでもいふやうな盛花である、例を掲ぐれば大和の吉野川にも見ゆる、京都嵐山の大堰川とも見ゆるのである、これには軸をもつて方々の名勝或は舊蹟を利かして活けたならば景趣眼前に表現してさぞ一興であらう。

いつぞや研究会を催した時に幅は極小幅であつたが素瀧の軸をかけて中央に高卓を置きその上に一尺の圓水盤に青葉もみぢを懸崖に副に青葉もみぢ、中間客位に姫百合を使った、この時多數の來觀者があつたが一同言ひ合はしたやうに瀧の飛沫が盛花の青葉もみぢに迸しつて雫が滴るやうな感じがするといふことを聞いたことがある、斯

三九

ういふ風に應用に依つては畫の瀧の飛沫も顔にかゝるか云ふ感じを活け生かすことが出来る、斯ういふ風な盛花は是非試みて貰ひたい、これは極美しい青葉もみぢの枝に少々注意すればそれでよいのである、巻頭に臙氣乍ら寫眞を出しておいた。

第十二章 七、八月の盛花

七月も八月も餘り相違はしてゐないのであるから兩月を合して書いて見やう、すべて夏は餘り澤山に盛つては却つて涼味を感じることは少いから成るべく瀟洒に盛らなければならぬ、先づ夏の盛花は自然本位の活け方が適當である、初夏から暑中へかけて暑中の深山、幽谷、溪流、池汀、と挿す方々は夏の斯うした自然の景趣を頭に浮べて挿したならば、大なる夏の自然の景色を小さく一盤に縮寫して盛ると眼前に深山も江河も溪流も眺むることが出来る、最初は二尺五寸位の長方形の水盛、齒朶と姫百合の二種である、その活け方は主に二本姫百合を使つて齒朶十本乃至十五本を中間客位に使ふのである、坐ながらにして溪流のさまを見せることが出来るのである。

尤も姫百合は當時は澤山培養して豊富であるが自然咲きのものは少く、深山幽谷でないで生ねないものであるから姫百合を挿す時はこの邊のこともよく考へて使つた方が好いのである、これは水盤前づみ又は後づみに活けるのが適當である。

夏櫛を主に河原撫子少々、齒朶、これは幽谷の景趣を現はした盛花である。

松五本を主に夏櫛副に中間客位に齒朶、客位に撫子少々、これは深山の盛花である、夏櫛を主に日蔭蔓を根元に中間客位に野生の睡蓮、この睡蓮は必ず野生に限るのである、西洋の睡蓮は花の大きいため少し自然から遠かるから成るべく野生の睡蓮を挿して欲しいのである、之れは山上の池といふ盛花である。

いつぞやの夏であつた、京に遊んだことがある、暫らく見なかつた暑中の金閣寺が頭に浮んだので早々金閣寺に赴いたのである。

金閣寺に一度遊んだ人はよく御承知であらう、園内には東山時代の榮華の跡がアリアリと伺ふことが出来る、向つて彼方の山は絹笠山である、或ひは龍門の瀧、それぞれの名石が墨々としてあるのであるが、龍門の瀧の水上に白蛇の塚といふのがある、

これは金閣寺の小僧さんが聲高らかに説明する所ものでその白蛇の塚に芦のやうなものが澤山あるのである、その左りの方に名も知れぬ雑木が水面に懸崖のやうになつて垂れてゐる、その下に野生の睡蓮が澤山咲いてゐる、斯ういふ風な自然の有様を水盤に活け生かすのである、睡蓮の野趣、野趣ある睡蓮の気分はこの景色を見て大いに覺つたのである、これはホンの實見談で一例に過ぎない。

近頃西洋の睡蓮を澤山使ふことがある、先づ睡蓮の色は白、黄、桃色、赤、紫もある、これは器の色彩、活けるものに依つて同じ睡蓮も色を異にせねばならぬ、睡蓮を用ひる時には山上の池とか又は池汀とか云ふ考へはなしにして單に夏草に配合したさゝやかな池を見るときいふ考へで活けるのがよい、一例を掲ぐれば太蘭を主に杜若を副客位に中間に睡蓮を使ふ、見るからにして涼味を解することが出来る、斯ういふ時は杜若の紫の色といふことに注意して睡蓮の色彩を選ぶ、黄、白が結構である、杜若の紫との調和が頗る好い。

若し野生の睡蓮を得ることが出来なければ成るべく西洋睡蓮の小なるを選ぶ方適當である。

蒲を主に河骨を中間副に中間客位に杜若、杜若を主、副に河骨、中間客位に睡蓮、これは桃色が結構である、芦を主に河骨を中間に水葵を中間に、客位に杜若、主の後に太蘭の五種である。

荇菴を主に河原撫子を副客位に下に日蔭蔓、これは流を見たる盛花である、蓮の盛花では葉を七枚、浮葉を二枚、花二本、蕾を高く、開を低く使ふのである、太蘭を主に蓮を中間副に河骨を中間客位に。

睡蓮を主副に中間に浮藻、客位に睡蓮、これは水草の盛花である、河端柳を主に副に芦、客位に河原撫子、この器は船形が結構である、松を主に五本、中間に三本、客位に二本、これは小松の盛花で海岸のさまを現はしたものである。

色彩本位としては、

アカマンサスを主副に露草を中間にベコニヤ、これは和洋折衷の盛花である、クロツキシニヤは小水盤の一種活け、露草を主に雁皮を中間客位に、アスバラカスを主に

中間客位にダリヤ、これは暑中の盛花としては美麗である、しかしよく配合調和に注意しないと却つて美しさを通り越して涼味をなくして暑さを感じることもあるから注意して活けなければならぬ。

ホクシヤを主にマガレットを中間客位に尺一寸位の水盤が結構である、雪柳を主に夾竹草を中間に客位にデジー、ポーケンベリヤを主にマガレットを中間にベコニヤを客位に。

かやつり草を主に早咲の桔梗を五本、小の水盤が結構である、朝顔白紫二輪、一種活けである、晝顔を主副に中間に猫ジャラシ、縞萱を主に百合を副客位に土用藤を主に中間に夏櫨、客位に齒朶。

青紅葉を主副に客位に名残の都忘れ、成るべく水を澤山見せる方がよい。

白百合を主に中間にダリヤ、客位に小車、籠が結構である、早咲の女郎花を主に河原撫子を中間客位に苧萱をその後この花は自然本位である、南瓜の花を二輪、主副に客位に河原撫子これも自然本位である。

夏の盛花は實に豊富であるが他は大同小異であるから略すことにする。

第十三章 九月の盛花

この月は残暑から初秋へかけての盛花である、水ものから述べやう、

杜若を主に河骨を中間副に客位に澤瀉、蓮も結構であらう、芦を主に（穂の出たもの）澤瀉を中間に、中間客位に浮草。

水ものはこれ位にして苧萱を主に秋海棠を中間客位に小の白の水盤、女郎花を主に葉雞頭を中間客位に苧萱を中間に、薄を主に桔梗を中間に客位に萩、苧萱を主に女郎花を中間に中間副に桔梗、中間に葉雞頭、客位に藤袴。

女郎花を主に中間客位に苧萱、全部齒朶、これは自然本位である、藤袴を主に中間に桔梗、客位に齒朶、早咲の白の菊を主に副に中間に小車草、客位に小菊、雪柳を主に中間にダリヤ、客位に小車、紫苑を主に中間に小車、客位に岩藤、萩を主に桔梗を中間に藤袴、アスパラカスを中心にカーネーションを中間に、客位に葵、熨斗目蘭を主

に中間客位に岩藤。

葉雞頭を主副に客位に鬘斗目蘭、薔薇を主に段菊を中間に客位に小車、苧萱を主に芙蓉を中間客位に是れは極瀟洒な水盤が結構である、珠數玉を主に早咲の吹上を中間に客位に馬蓼、苧萱を主に雞頭を中間に副に女郎花、桔梗を中間に客位に藤袴、中間に萩、大籠が結構である。

梅もごきを主に中間に小車、客位に段菊、これは籠が結構である、薄を主に早咲の白の菊を中間副に客位に萩、茶の花を主に嫁名菊を中間に蓼を客位に、サンザシを主に雞頭を中間に鳥兜を客位に、紫苑を主に有職菊を中間に客位に黄の葉雞頭、これからは秋の自然本位の盛花である、小判形二尺五寸が結構、女郎花を三本主に桔梗二輪中間に藤袴、中間に苧萱、總て齒朶は一面に使ふのである、この齒朶の使ひ方は成るべく花止が見えないやうにする、これは秋の山の風趣が掬める。

秋の七草の盛花として薄を主に女郎花を次ぎに萩を中間にわれもこうを中間に葛を客位に副に藤袴、桔梗を中間に、七草の盛花として美しいやさしい情趣があらう、七

草は流儀花などではいろいろ種類があるが右の種類は盛花として最適當であらう、大籠か大水盤が結構である。

以上の盛花は初秋から仲秋へかけての配合である、丁度九月は仲秋名月の月であるからお軸を一幅應用して自然から見たる盛花に就て記さう、

第十四章 名月の盛花

この軸は仲秋の月だけが結構である。

この月の軸をかけてさまざまの盛花をすれば尤も興味がある、これは自然本位である。

活け上げればこの軸の月が山上にも見わやう、又池汀とも見わやう、流れとも見わやう、廣野にも連想が出来る。

今、題を分けて一々記すことにする。

山上、池汀、湖畔、溪流、廣野、河川、片田舎、海岸、

廣野の月 小判形の成るべく大水盤に芒を主に次に藤袴、萩これは成るべく水を見せない方がいゝ、これも讃に依つては嵯峨野、武藏野、宮城野のやうなところを連想することが出来る。

川の月 小判形の水盤、前づみに芦を主に三本、根元に川傍柳、中間に嫁名菊、廣い川を想像することが出来る。

一例を掲ぐれば宇治川とも見ゆる、淀川をも連想することが出来る、これには讃があればそれ〳〵有名な川と結びつける、若し讃がなければ、唯川傍の月といふてもよいのである。

山上の月 山上の月と見るならば杉を五本乃至七本、日蔭蔓、藤袴、これは小判形に活けるのである、成るべく水を見せないやうにしてほしい、若し月のお軸に俳句或は歌の讃があるなれば、同じ山上の月でも名所の月と見ることが出来るのである、次ぎは池汀の月 圓水盤に前づみに芦の穂の出た分を三本乃至五本、菱、澤瀉、水を豊富に見せるのである、すれば池汀の月と見ることが出来る、山上の月と同じで

俳句、詩の讃があれば廣澤の月も描くことが出来るであらう。

湖畔の月 松を主に芦、日蔭蔓、これを前づみに挿すのである、嫁名菊を少々用ひる、松は二本位が結構である、これは出来得る限り、水を澤山見せるのである、注意をして挿さねば海岸に往々なるのである。

溪流の月 松を主に中間に夏櫨、女郎花、荳蔻、桔梗、小判形の水盤がよい、後づみと前づみに活ける、中間に水を見せる、明月水にあり、水月の動くが如きを見ることが出来るのである。

片田舎の月 銅の水盤、唐黍を主に中間に蓼、客位に野菊、この花は唐黍を大きな葉の垂れた間より名月を見せるといふやうな趣向である。

海岸 長角或は小判、小松を主に水盤の前に九本乃至十一本、これに長短を拵へ、月見草を少々二種が結構である、これは松によほど注意して活けなければ海岸の氣持は不可能である、この松は海岸といふ趣で、枝をこしらへてさせば、松によつては怒濤の高い荒磯とも見わやうし、又波靜かなる瀬戸内海とも見ゆる、先づ月はこの位に

しておく、この外月に就て讀者の意匠によつて種々と面白い自然を活けいかすことが出来るのである。

五〇

第十五章 十一月の花、菊花の盛花

季節も秋の終りになつたのであるから花もよほど變る、仲秋から晩秋へかけては殆ど菊花本位と云つてもよい位である、菊の盛花を少々述べやう。

菊花には言ふまでもなく大菊、中菊、小菊の區別がある、大菊にはいろいろ銘のついた厚物、薄物と云ふものがある、言葉をかへれば瓣の多いもの、又單瓣のもの、又は管咲きもあるのである、盛花に應用する大菊は少し種類を選ばなければ困難を感ずることがある、何故なれば花壇用の菊は花本位で軸の極細いものを往々見受けることがある、この花は立て、ある竹のために立つてゐるのである、もし竹をこれば花の重みで自然に下る、斯う云ふ風な花は成るべく選ばないのが得策である、盛花に應用する大菊は花も大きく軸も太く總て力のあるものが結構である。菊の種類は殆ど數へ

切れぬほどあるが實驗上應用の出来る菊花をそれ／＼名を掲げて示すことにせう、但し一々銘を指定しても作りやうによつては盛花に應用の出来ないものがないとは限らないからさういふ時は弱く育つた菊は使はず元氣のよいものを選んでほしいのである、先づ最初は二種の菊の盛花である。

夜光の玉三本を主、副に客位に紫雲山（小菊）、この器は丸水盤の尺位か手附の籠

次ぎは一種である、新高砂七本主に三本、副に二本、客位に二本、これは尺二寸の丸水盤がよからう、この花は黄色である。

次ぎは中小菊の盛花である、鸚鵡菊を主副にこれは桃色の花である、汐風を中間客位にこれは尺位の水盤が結構である、一文字を主に白の小菊中間に黄の中菊副客位に三種である、器は手附の籠がよい。

大中小の配合せ五種の盛花では虎の座を主に中間に野分の月、次ぎに薄もみぢ、副に巴、これは中菊である、客位に名月、この盛花も手附の籠が結構である。

日だるまを主に盤雪を中間副に紅七子（小菊）これは大菊二種、小菊一種の盛花で

ある、麟芳閣を主に松の雪を中間に紅雲遊を客位に中間に小菊の二種、その中の一種は松の雪（白）である、他の一種は紫雲山（紫）である、小判形の大水盤が結構である。

次ぎは小菊だけの盛花をいへば秋の月（白）、黄の小菊、本数は五本、八九寸の水盤を選んで貰ひたい。

玉だすき（大菊）を主に夜光の玉客位に櫻菊、これは中菊で白桃色である、この中間全部に半田菊（中菊）を使ふ、これは大菊と中菊の盛花である。

歌姫を主にこれは黄菊である、水晶（白の大菊）を副中間に、鸚鵡を中間に客位に夜光の玉、中間に小菊、この小菊の色は全部金茶がよからう。

次ぎは大菊九種の盛花、新高山を主に黄金山を次ぎに山家の春、見返り櫻を副に蟠龍を中間に黄金牡丹を中間に客位に新高砂、麟芳閣、むつの山、この盛花は出来得る限り大の器がよい、本数にすれば各七本づゝ合計すれば六十三本、斯ういふ盛花をおく時分には一間半位の地板の床へ置けば菊の盛花として芳美の極である。

小菊の大盛花では吹雪の松を主に紅櫻を中間に花吹雪を副に早乙女を中間に壇の浦を中間に汐風を中間に眉剃毛を中間に秋の月、紅七子を客位に都合九種の盛花であるこれも出来得る限り大水盤が結構である、但しこの盛花を小さく企てるなれば各花の本数を減らしさへすれば尺二寸の水盤に挿すことも出来るのである、大きく企てれば三尺の小判形が適當である、菊はこれ位にしておかう。

第十六章 晩秋の盛花

忘れ草を主にこの花は花屋では俗にきすげといふてある、斑入のがくそを中間にこのがくそは季節外れであるが配合せがいくから使ふことにする、客位に薔薇の三種である、ハイマンチウスを主に紅にんどうを客位副に、これは小さな水盤が結構である。

蔓桔梗を主に副客位に小菊、小水盤が結構である、胡蝶蘭を主副にゼラニウムを中間客位にこの胡蝶蘭は色彩の變つたのが澤山あるが先づ白と桃色を選ぶ白の胡蝶蘭

なればゼラニウムは紅、ごき、薄桃色が結構である、若し桃色の胡蝶蘭なれば白のゼラニウムを選ぶのである、これは胡蝶蘭は少し垂れるものであるから中卓にのせた方がよいであらう。

次ぎは早咲きの椿（白、銘初嵐）、七八寸の水盤に一種活けである、瀟洒にして優美な盛花である、秋咲きのダリヤを中間にマガレットを客位に、主にアスバラカス、これは色彩本位の盛花である。

ドウダンつゝじを主に日蔭蔓を中間に、客位に小菊少々、これは自然本位である、器は小判形の水盤が結構である、次ぎは紅葉の盛花を云はう、水盤の後づみに紅葉を高く、黄葉を副に客位に青葉中間に枯れ木を少々見せるのがよい、この盛花は水を成るべく豊富に見せるのである、何故なれば流に沿うて生ひ育つ有様を活けいかすのである、見る人の頭によつては關西なれば箕面、高雄、嵐山、龍田、關東なれば日光、瀧の川、塩原など自然の風趣何れも水に縁あるところである、これは活ける人の眼によく映じたもの、景趣をさゝやかなる水盤に描くのも一興であらうと思ふ。

八朔梅を主副に有職菊を中間客位に銅の丸水盤一尺二寸位が結構である、セモローカ、オーランテエーカを主副に吹上菊を中間客位にこれは手附の籠が結構である、薔薇クリーム色を主に中間に桃色、客位に白、これは丸水盤が結構である、うんせんつゝじを主に椿を副客位にこれは二種活けである、薔薇を主にダリヤを中間に雛菊を客位に器は丸水盤、トゥゴマを主副に銀世界（白の菊）を客位に中間にダリヤ、カトレヤ（西洋の蘭）一種活けである、器は青磁の水盤が結構である、松を主に夏櫨を副に山菊中間につげを客位に、われもこうを中間にしだを中間全部、小判形の水盤、これは自然本位である、斯ういふ花が名稱をつければ名残の山路と云ふべき花である、雪柳を主に山菊を中間副に中間にゼラニウム、これは和洋折衷の盛花である、この外種々あるが大同小異であるからこの位にしておく。

第十七章 十二月の盛花

この月は冬の盛花である、一般に材料の乏しい時季である、自然に材料を採集する

にも殆ど困難である、先づ材料は温室ものを應用しなくてはならない。

總て色彩からいへば、冬季は濃厚な色彩が適當である、但し軸との調和といふこととなれば、少し趣を異にする、若し濃艶な軸を選べば盛花は云はずと淡彩を選ばなければならぬ。

一體に冬は色彩本位の方が適當である、色彩も殆ど挿す花全部温み味といふことが肝腎である、これを水盤に盛るには餘程注意をせんければ初夏の花になつたり暑中の花になつたりする、八九月頃の花にも示してある通り夏は成るべく涼味を探り冬は温み之花の趣にこめる、これが混合するやうなことでは冬の盛花は不可能である。

一尺の丸水盤三種花を挿し水盤中に水を見せるといふことは絶體の禁物である、水盤中全部花を挿して行くのが冬の活け方である、若し小判形大水盤を應用することがあるならば、先づ自然本位である、自然本位は十二月の初めより年末から初春へかけて出る葉南天を選ぶのである、水仙も應用する、日蔭蔓も應用する、寒菊も應用する、斯ういふ種類の花をもつて自然の花を活けいかすのである、これが十二月の花の選び

方挿し方である。

葉南天を主に副に三本、中間客位に寒菊少々全部日蔭蔓を應用する、主の南天について話さう、若し實ある南天でも成るべく締つたものなればいゝが實のあるものは葉も大きいし丈も高いし流儀なんかには適當であるが盛花のやうに低くつかふには困難である、葉南天は葉も締つてあるし、丈も低し盛花として適當である、次は葉南天三本を主に副中間に寒菊、客位に春蘭の實を用ひるのである、これは丸水盤が結構である、尺以上二寸まで、次ぎはセイヒ椿二輪小なる籠、小なる水盤が適當である、この椿は同じやうな種類でも太神樂といふ銘のある椿とよく似てゐるので八重の大輪である、寒い氣節の床を飾るとして適當である、色は深紅、絞りもある、水仙を主副に藪柑子を中間客位、下は全部日蔭蔓、小判形二尺の水盤が結構である、斯ういふ花は同じ自然本位のものでも山といふよりか廣々とした平地と見た方が適當である、又同じ自然本位でも日蔭蔓に代ふるにしだをつかへば一見山を想ふのである、材料はどちらでも山のものである、使ひやうでは確かに平地に見ることが出來得るのである、次ぎ

は雪柳を主に薔薇を中間に寒菊中間副にこれは色彩本位、この薔薇は秋咲きの名残の花を使ふのである、器は手鉢或は銅の水盤である、薔薇を主にセラニウムを中間副にマガレットを客位に、器は尺、色は青磁或は空色が適當であらう。

せんりやうを主に副に水仙、客位に寒菊、これは手附の籠がよからう、但し水仙は五本、せんりやうは三本、寒菊は見計ひ、器は黄色の水盤がよからう、寒牡丹二輪、色は何れも桃色である、器はふくべ、或は青磁の水盤が結構である、斯ういふ花は茶室でもよし、總て小室が適當である、雪の軸でも應用したらさぞいゝ調和であらう、セイヒ椿を中間に寒菊を客位中間にアスバラカスを主に、この花は色彩本位である、斯ういふ花を挿すと白の丸水盤が適當である、この花に就て自然と色彩のことを少し書いておかう。

セイヒ椿は木のものである、アスバラカスは温室の草である、理屈をいふならば、木が低くて草を高く使ふとは如何にどの間を發する人もあるであらう、即ちこゝである、わが盛花は色彩本位のもは自然に多少遠ざかる所があるかも知らぬ、この花が

即ち出生からいへば、不自然であるが色彩からいへば當を得てゐる、冬の季節にセイヒ椿のやうな濃艶な花に翠色の淡衣を被せたやうなアスバラカスを使つて黄色の寒菊をつかふのである、實際に於てこの花を應用して床におけば、先づ理屈はさておき色彩の美にあこがれるといふことになるのである、これは色彩本位の一例を引いたのである、この事を記しておかんと何も自然、彼も自然と融通の利かない理屈家が飛び出してグヅグヅいへば讀者もさぞ迷惑だらうと思ふから参考までに記すことにする。

小松を主副に客位に松、中間に日蔭蔓、藪柑子、このお花は小判形が適當である、挿しやうによつては冬の山路、冬の海岸、何れとも名稱を附することが出来る自然本位である、松は五本乃至七本で結構である、杉を主副に三本、しだを中間に雜木の枯枝を主副の中間に春蘭を客位に根元に寒菊少々、これは自然本位である、この盛花の寒菊は名残の山菊といふつもりで挿して貰ひたい、小判形の三尺位の水盤が適當であらう、斯ういふ盛花に寒月の軸でもかけたならば、杉の木蔭に猿の聲、猿の齒白し峰の月の句を連想すべき花である、これは濫い花である。

アスパラカスを主に葵を中間副にマガレットを客位にこれは洋花の色彩本位である、冬であるから材料は何れも豊富に使つて貰ひたい、洋館應接室に適當である。

ボンセチャを主に寒菊を中間に客位に春蘭の實、これは和洋折衷の花である、雪柳を主に葉牡丹中間に副中間葵、中間寒菊、客位に春蘭、色彩本位である、器は大籠でも小判形でも結構である、臘梅を主副に中間客位に紅白の椿、これは丸水盤がよからう。

苔附つゝじを主にせいひ椿を中間に客位に寒菊色彩本位である、春蘭を主に名残りの笹龍膽副中間に客位に全部した、自然本位である、冬の山といふ名稱をつけるに適當な花である。

この月の取り合せは十一月の末より十二月二十日頃までの取り合せである、總てこれから取合せは新年の趣向の花に總て花屋などにとゞのわられるといふ季節であるから二十日以後の取り合せは一月の取り合せを應用すればいゝのである。

春夏秋冬の盛花の取り合せの数はこの外に數百種類あるのである、一々書き列べた

ならば到底書き盡すことは不可能である、この書を読まれた人々は多少の色彩に或は自然に成るべく遠ざからないやうに應用して行けば居ながらにして天地間の大自然を描き、居ながらにして色彩の最善美を盛り上げるといふことは先づ疑ひなからうと思ふ。

取合せはこれにて筆を擱き次ぎに盛花に就て自然應用、逸話、旅行先にて企てたる盛花の器、花の取り合せその他のいろ／＼を盛花雑話として以下示すことにした、但し参考になれば著者の満足この上もない。

盛花雑話

六二

能畫應用の盛花

この話は私の友人に謠曲通がある、能畫も多趣味であつて種々の軸を所持してゐるのである、去年の秋であつた、計らずも友人の宅を訪づれたことがあつた、斷つておくが私は謠曲といふことは知らない、友人は云ふ、

「時に、君、近頃は大層謠曲が流行するが少し初めたらどうか」とすゝめた。

「ありがたう、御存じの通り年中いそがしいので苦んでゐる私には稽古したいのは山々だが殆ど寸暇がないのである」と云つたら、丁度幸ひ今日は折角見わたるのであるから三四幅の能畫の軸をお眼にかけやう、盛花なればこの軸に對して調和よく活け活かすことが出来るであらうといふ問であつた、私は謠曲の文章も何も知らないのである、この繪に就て謠曲の面白い文章のところを説明にあづからば、こじつけながら挿して見やうと答へたのであつた。

第一番に床に掛けられた軸は「三井寺」であつた、狂女が篋をもつてゐる圖である、

六三

この軸の上の色紙形のところに三井寺の一節があつた。

六四

よし花ももみちも月も雪も古里に、わが子のあるならば、田舎も住みよかるべし、いざ古里に歸らん、歸ればさゝなみや滋賀、唐崎の一つ松。

といふ、これだけ認めてあつた、友人は早速私にこの曲の要點を説明して呉れた。

これは狂女が子をたづねて三井寺に迷ひ來るのがこの曲の眼目である、この本の一番初めに「南無や大悲大慈の觀世音、さしもぐさ」の文章があつて、三井寺の觀世音を祈りつゝ野端に倒れて一睡の夢をむさぼつたのである、この夢のうちに尋ねる子は三井寺へ來れば、會ふことが出来るであらうといふ靈夢が最初である。

又ワキ即ち寺僧である、澄み渡る月を三井寺の講堂の庭に幼き人をも伴うて今宵の名月にあこがれてゐるといふのであると友人は語つて更にその奥に斯ういふ文章があると謠つて聞かせた。

「比ひなき名も望月の今宵とて夕を急ぐ人ごゝろ、知るも知らぬも諸共に、雲をいどふやかねてより月の名たのむ日かげかな」

この軸にしてこの名文章を聞くと、軸の上の文章と照り合せて私はスツカリ畫中に捉はれて了つたのである、友人は「斯ういふのであるから何か花を挿して貰ひたい」と云はれたのである、早速電話で花屋に花を注文した、丁度幸ひ小判形の水盤があつた、取り寄せた花の種類は、すゝき、女郎花、葛の花、桔梗、藤袴、松いろいろあつた、秋の半ばの近江路にはさぞ秋草の咲き誇つてゐることであらうと直ぐ頭に浮んだのである。

すゝきを三本主につかつて葛の花を中間客位に副に女郎花を極瀟洒に二本、中間に桔梗を三輪、主と副との中間に三本ほど、しだを全部つかつて水盤の前づみに活けて後は水を見せたのである、友人は「この花はいゝ感じの花だ、仲秋明月の花として適當である、近江路を狂女がたどりくゝて三井寺に來る途すがらを伺ふことが出来る、且虫の音も聞ゆるやうな感じもすると」云はれた。

これは果して當を得たか得なかつたかは謠曲を知らぬ私には判斷に苦むのである、よしあしは讀者に任せやう。

六五

次ぎの軸は井筒を出された、この繪は井桁があつてその隅にすゝきが三本立て、あり冠裝束の業平がある軸であつた、これも同様説明を促した、友人曰く、これは紀の有常の娘と業平との由緒のある在原寺の古塚のことであると言はれたので又文章の中に旅僧が在原寺の古塚をたづねて夢のうちに業平の古事を見るのであると語つた。

丁度幸ひ備前の丸水盤があつた、花屋が餘分に野菊、蓼、薊萱といふやうなものがあつたのでこの盛花は少し秋の名残の花といふので挿したのである、薊萱を主に野菊を中間副に客位に野蓼を少々つかつたのである、友人は曰く、成るほどこの花もよい、軸にすゝきがあるから却つてやさしい草花を挿したのは大層結構である、能書應用の盛花といふことにしておかう。

大和法隆寺のうち中宮寺に於て田野の花を採集して活け上げたる盛花

これは私の企てたのではない、一部の社中の人々と共に千年の都跡なる中宮寺尼院に一日の清遊を試みたことがあつた。

この中宮寺に行くといふ緣故は畏れ多くも東宮殿下が桃山御陵へ御參拜あらせられたる時中宮寺に行啓相成るに就て拙なき私どもの盛花を献花せよといふお話で私は大阪よりいろ／＼の花を用意して中宮寺へまゐつたことがある、中宮寺は南都法隆寺に近くなか／＼格式のあるお寺である、代々宮家から御門主におすわりになるといふことを伺つてゐる尼院である。

時は五月の中頃であつた、社中の人々と中宮寺へ行つたのである、おみやげとして私は盛花二瓶持参したのである、お花は縞の白ちくど杜若、カラ、モ一瓶はソケイ、牡丹、撫子の白の三種である、元來この野外の盛花を企てる時には總て社中の人々はそれ／＼挿す籠、水盤、花止めは持参をすることになつてゐるのである、この日も例に依つて一行皆持参せられたのである、その中一人一番に採集されたのは芦の若芽、次ぎは白のたんぼ／＼を採集され、それからげんげ、すみれ、ねんごう、大根の花などの野草をそれ／＼採集したのである、法隆寺の驛から十丁ばかりで尼院へ着くのである、この寺院は世の中にやかましき夢殿の觀世音のあるところである、一説に惡夢を

見た時には必ずこの御堂に祈れば吉夢にかへて頂くといふ傳説がある

中宮寺の建築は以前は推古式であつたが中途兵火のために再建になつたといふ話もある、それでもよほど星霜を経て蒼然たる有様である、お座敷でそれ〴〵水盤を陳べ寺院の裏庭、畑で又思ひ〴〵に採集したのである、採集の材料をありのまゝ示すと、青麥、新菊の花、わんごう、ほうれん草の花、小梅の芽出し、柿の葉の芽出し、雪の下、ざぼうし、つはぶき、なづな、撫子、朱菊、藤、都忘れ、いちはず、いたごり、石榴の芽出し。

斯ういふ種類であつた、斯く社中の人がこの材料を以て活け上げられた取り合せは、斑入のつはぶきを主副に、大根の花中間客位に白の丸水盤、次ぎは石榴を主に朱蘭を中間副に新菊客位に南蠻の丸水盤、いちはずを主副に中間客位に新菊の花、くさしたを主に撫子を副客位に白の小水盤、いたごり、新菊の花、たんぼ、手附の籠、小梅を主に新菊を中間に客位に都忘れ、樂焼の水盤、わんごうを主に撫子を中間に新菊を客位に銅の小水盤、高卓に藤の白紫、麥を主に中間新菊、客位にわんごう、なづなを主

に白のたんぼ、を中間に、客位に都忘れ、籠。

つはぶきを主に石竹を中間客位に小の手附の籠、わんごうを主に新菊を客位にこれは白の水盤、斑入のざぼうしを主にわんごう客位に、中間に菜の花、まだその外にあつたが大同小異であつたからこれを省く。

これを活け終つて尼院の心づくしの晝餐をすまして、佛殿に参拜し寶物拜見をすませ、茶席へ御案内にあづかつた、當日は成るべく寺院に手数をかけないため直門の者どもに申しつけて茶席の用意をさしたのであつた、私は先きへ茶席に入り茶花を一瓶活けたのである、私は中宮寺といふものを見るときは尼院であるから總て色彩が白とか黒とか紫とかいふ色が主になつてゐるやうに感じたので茶花はどこまでも濃くといふ考へであつたが氣をかへて瀟洒にして艶な花を選んだのである、竹尺八の掛花活にそけいを一枝、それに桃色絞りの撫子二輪活けたのである、飾りつけは眞の長板飾りがしてあつた、軸は歌の横物、茶席は下座床になつてあつた。

正客に門主それ〴〵席が定まつた、この席で私のうれしく感じたのはすべて茶席は

陰氣に出来てあるものが多いのであるけれど、この茶席は坐つてゐて空が見るといふ曠やかな席であるため大變氣持がよかつた、茶席の椽に立てば、三輪山を右手の方に、左に春日山、木の間に若草山が見ゆるといふのである、お手前中は蛙の聲と雲雀の聲を聞きながらお茶を一服頂戴することが出来たのである。

・お茶が終る頃より雨が少々降り出した。

自然應用の盛花

出嫌ひの婦人が盛花稽古のため旅行好きになられたといふ話、この婦人は至つて社交界に立つことが嫌ひであつた、唯お宅で盛花の稽古を始められたのである、稽古をしてゐるうちには色彩の盛花、自然の盛花、いろ／＼二年ばかり教へたことがあつた、そのうちに段々と盛花が上達せられて自然本位が尤も得意である、ある時自然本位で海岸の盛花を挿したのである、ある時は初夏の山路と云ふ名稱をつけるやうな自然の盛花を挿して見せて上げた。その時何の考へもなく斯う云ふ自然の盛花を挿すと云ふ

ことに就ては大體の規則は動かすと云ふことは出来ない、先づ直覺的に見た人に、海、山、川、池と云ふやうな感じを興へるといふことに就ては、成るべく廣く山の趣を春、初夏、秋と云ふやうな具合で山に登り初夏の海岸、秋の廣野、春の梅、櫻、晩秋の野山と云ふやうに自分に自然と接近をして見られたならば、教はらなくとも活けいかすことが出来るのである、殊に汽車旅行には春夏秋冬その折々の汽車の窓より種々變つた外の景色を眺めて行くこと云ふことは尙結構である、例を挙げれば、秋なれば窓近い山に小萩附近に桔梗、ズツと離れて女郎花と云ふやうに自然にして色彩もよく咲いてゐる花を見ることが出来るといふことも話したのである、丁度四月頃であつた、一二回稽古を休まられたことがある、其の稽古を初められてそのお宅へ行つた時に突然に、「先生お蔭で盛花の稽古をするために云ひ知れぬ面白い旅行をいたしました」といふとであつた、至つてお出まし嫌ひの人が妙だとは思つたが、ごちらへとたづねたら、江の島、鎌倉から東京、松島、日光へまゐりました、車中の夜は仕方はないが晝のうちは一寸も退屈をしないで旅行をして歸りました、それについて非常に徳を得たこと

が澤山あります、お話しするとなか／＼長いのですが簡単に申します、東海道で辨天島附近の松の調子がかねてお稽古のうちで小松を五本乃至七本使ふお稽古をしたことがありますが濱名湖附近の松を見ると如何にもお話の通り長短も面白くつき自然の幹の振り具合、得も云はれぬ姿で非常に松といふことに面白味を感じました、私はこれまでには餘り旅行をしませんでしたが、自然の盛花に興味をもつてから旅行が好きになりました、話が前後するかも知りませんが焼津といふところがあるやうに思つてゐます、その附近に小松が澤山一面あつて山つゞじが奇麗に咲いてゐるのを汽車の窓から見ました、これらを小判形の水盤に應用したならば直ぐ自然を應用した盛花が出来るとにと思ふと急行列車が怨めしいやうに感じました、いろ／＼考へてゐるうちに天龍川、大井川行く先き／＼の川見ればその附近に生ひ茂る雑草、叢を見て川邊のさまを頭で盛花に描き舊東海道の松並木を見ては盛花を思ひしてゐるうちに丁度御殿場附近であつた、いつでしたか、先生のお話で社頭の杉のお話やら遠山の雪のお話を綜合して自分の頭に浮んだのは丁度窓の前面に富嶽を眺めて杉の一むらを見るところがあ

りました、その杉の中にさ／＼やかな社があつて名の知れぬ枯れた大木の枝が杉の中から交つてある、その下を見て日蔭の蔓をつかつたならばい／＼だらうと思つてゐるうちに箱根の方に汽車は進んだ、丁度箱根の山又山の間から富士が見えたのであつた、斯ういふ木の立ち茂つたやうなところを活けて富士の繪でもかけたならば遠山の雪はお眺へだなど思はず獨りで頷きました、斯ういふ風に自然の景色を見るにつけても旅行といふものは楽しいものだと思つて／＼感じました、いろ／＼考へ且樂みつゝ汽車が東京に着きました、東京で各方面に櫻を見てはかねて櫻についていろ／＼お話のあつた櫻の自然を知ること出来ました、それから日光、松島と行かねばならず、御承知の通り松島は随分東京からあるにもかゝらず早く行きたくて仕方がありませんでした、又日光は杉の豊富な場所で楓の芽出し等があゝかこうかといろ／＼想像のうちを描かれて東京を出立する日を待ちかねました、おかげさまでこれから先きは暇のあるたびに山陰も行きたくし九州も行きたくし、そのうちでも橋立とか宮島とか、あらゆる方面の景色を見たらば、さぞ自然から見た盛花の博士になれるでせうと云つて笑はれま

したと婦人は語られた、これは唯讀めば一種の旅行談に過ぎないが、よく味へば自然本位の盛花を得意で活ける人は非常に参考にならうと思ふ。

旅行先で活けた盛花

これは四月の半ばであつた、二三日の暇を得て武田尾へ行つたのである、武田尾は山間幽邃に温泉のあるところで、入湯の餘暇、あまりつれづれであつたので鉄を片手に川向ひの山へ登つたのである。

丁度山櫻も咲いてゐる、つゞじも少々咲いて居つた、雜草雜木の芽出しものが澤山あつた、最も自然採集の花は都會で居ながらにして挿すやうなわけには行かない、主になるものを見つけて中間に紅い花を用ひたい、又客位に白の花が用ひたいといふやうなことは殆ど不可能である、自然は自然のやうに應用しなければならぬ、そこで私はあちらの溪間、こちらの山蔭、散歩かたぐいあらゆる材料を採集したのである、名も知れないいろ／＼の花も澤山あつたのである、採集した材料を記せば、

山櫻、げんげ花、たんぼ、春蘭の花、つゞじ、夏檀の芽出し、しだ、すみれ、か
んざうの芽出し、あかほの芽出し、さんきらひの芽出し。

確かこの位であつたと思ふ、何を云ふにも山間幽邃でさう變つた材料も採集するといふことは困難である、同じ自然に採集するのにも片田舎の前圃後圃なれば亦考へもあるであらう、これは山間の材料として應用したのである、これだけの材料を手にして宿に歸つた、ウカ／＼採集はしたもの、今に歸つて盛るといふことに就ては水盤或は籠といふものゝ必要を感じて來る、宿のものに器のあるなしをたづねたら水盤らしいものは何んにもない唯流儀花に應用する一尺三寸位の砂鉢一つあるといふことである、現在趣味をもつて採集した材料を花器がないと云つてそのまゝ茶にして了ふのも心ない話である、いろ／＼考へた結果即席に種々なる食器、その外日用品を應用して全部のものを活けて広い座敷へ陳列をした、ところが宿の主人や家内の人々が圖らずも見て、これは立派な花會が出来ました、この附近に一人の巡査が生花の趣味をもつて居る、その外温泉に入湯旁々の滞在客の中にいろ／＼好きな人があるから是非

共縦覽を許して貰ひたいといふ頼みであつた。場所も山間である。又器も突飛である。都會の便利な場所では材料は得ることは出來ぬであらうが器に至つては殆ど笑ふに堪へない。斯う云ふ花を社中の人ならば兎に角、知らない人に見せるといふことは考へものである。盛花の器といふものは斯う云ふ劣等なものを使ふのであるかと思はれるのも片腹痛い話であると思へた。しかし又考へ直せば總て全國の數百の門弟のあるわが盛花である。用意周到な器や材料を持つならば、少し稽古をすれば出來るであらう。假りにその社中のうちで避暑或は避寒旁々温泉又は片田舎のやうなところへ行かれる人もあるであらう。その時に水盤も花止めも用意があれば兎に角である。散歩かたがた山に登り野に遊ぶといふ時にはある花を見て即興を描くことがあるであらうと思ふにつけてもさういふ時に食器又は日用品の何かを應用して挿すといふのも一興であらうといふ考へもあつたので縦覽を許すにしたのである。宿屋の主人はそれ／＼案内したために、つれ／＼のあまりに困つてゐる人達がゾロ／＼とやつて來られた。ところで速席應用の器を見て何れも言ひ合はしたやうにこの器はどちらからお用ひになり

ました大層結構な器でございますと云つては賞められた。第一番に宿屋の主人が自分の家から借して呉れた洋食皿を見て非常に感心して居つたので思はず噴き出した。しかしこの企てが面白いからと云つて始終斯ういふことをしては感心が出來ない。前に云つた通りつれ／＼の折には偶には一興であらうと思ふから盛花雑話のうちに加へたのである。使用した器は、

洋食皿、 錦手平井、 平鉢、 藍繪大平皿、

短冊箱のこぼし、 手附菓子鉢、 銅の砂鉢、 手附炭籠、 天然刳抜き小判盆。

この道具で左の配合でそれ／＼活けました。

洋食皿 これには春蘭を主副に中間にたんぼ、の二種である。

平鉢 尺一寸位、夏櫛の芽出しを主に中間客位につ、じ少々中間全部をしだ。

錦手平井 一尺二寸位これにはあかぼを主に山かんざうの芽出しを客位に中間につ、じの三種。

藍繪大平皿 一尺五寸位、山櫻を主に夏櫛を副に、しだを中間全部、客位に春蘭の

花、葉、中間につゝじの五種。

七八

短冊箱のこぼし 山かんざうの芽出し、すみれ二種である、この花はよほど雅味のある花である、山かんざうは翠の滴るやうな葉の色、その中間客位に山すみれをつかふのである、瀟洒な花である。

手附菓子鉢 丁度宿の裏に自然生ねの麥が少々生ねてあつたのでその麥を三本主にげんげを中間客位にする、山間にて田野の氣分の花である。

銅の砂鉢 さんきらひを主に春蘭を副につゝじを中間客位にこの水盤は少し深いので中をのぞいて見るやうな花である。

手附炭籠 山櫻を主に副客位に春蘭二種。

丹波焼の鉢 たんぼゝを主副に客位にげんげ、これも野趣ある花である。

天然割り盆 つゝじを主副に中間全部した、副に山かんざうの芽出し。

都合十瓶活けたのである、前に書いてある通りこれらの花も床脇や有合せの臺にのせて陳列しそして宿の主人の要求通り滞在客の同好者並に例の巡査が見に來られたの

である、この中で私の感じたのは巡査である、この山間の駐在所の任務の餘暇に生花の風流を味つてゐるといふのは實に慕はしかつた、嚴めしき姿でこの陳列してある花を一瓶毎に入念に眺めて身體を右にひねり、或は左にひねりたる結果感嘆の聲を上げたのである、後から見た姿はどうにも花になつてゐるやうなスタイルであつた、巡査曰く、斯ういふ山の中でこんな結構な材料はどこにありましたかといふ不思議な問ひであつた、これには向ふの山、流れのふちで採集したのである、即ちこれは自然をこつて技術によつてそれ〴〵器によく調和して挿したのである、見らるゝ通りの即席の器に挿上げたのでそれほど感心するやうな花ではないと答へた、巡査曰く「滞在は何日間位ですか、長ければ少し師範にあづからう」といふことであつたが折角ですが明晩は大阪へ歸るといへばそれでは明朝山をあさつて材料を採集してまゐりますから是非教へてくれと云はれたので快よく承知をした、その外に婦人二名、母親と令嬢が同じ宿に泊り合せて居られた、この人が花を見に見てこんなところにこんな美しい花を拜見するとはまるで夢のやうなものである、それについては甚だ失禮ではありますが

七九

持合せの薄茶少々ありますから私等二人が見においでになつた方々に臨時お茶席をして一服差し上げることにするといふことであつたので、私は大變嬉しかつた、直ぐ賛成をして早速應用されたので斯ういふ山の中で花に縁のある臨時茶會を催すすべて來觀者の方々といろ／＼風流談に耽つてその夜は晩くまで遊びました、到底都會では見ることゝも聞くことゝも出來ない、自然の花會、自然のお茶席、風流な巡査、よく調和がと、のつてゐる、何かの參考までに記すことにした。

四季の盛花 終

大正七年五月一日印刷
大正七年五月五日發行



定價金壹圓五拾錢



著作者 小原光
大阪市東區瓦町一丁目八番地

發行者 松阪寅之助
大阪市東區平野町三丁目二十九番地

印刷者 荻野八三郎
大阪市西區土佐堀裏町二十七番地

印刷所 ミカド印刷合資會社
大阪市東區北久寶寺町二丁目三七地

發行所 大阪市東區平野町三丁目
女學生畫報社

電話本局三七二六番
振替大阪四〇五四二番

10
260

終